



ふつう語訳
源氏物語

～桐壺～

渡 司

桐壺(1)

——いつの時代のことであったろうか——。

——いずれの御代のことであったろうか——。

後宮に女御、更衣が、数多く帝に仕えていた頃だ——。

帝の権威はこの上なく、定まった外戚の力が、特別に強いわけではない——そんな時代の事だったろうか——。

その数多い女御や更衣のなかに、最上の身分であるわけではないにも関わらず、後宮に仕えるどの女よりも、優れて帝の寵愛を一身に受けていた「女」がいた。

「女」の身分は「更衣」。

大納言の家柄に生まれ、大臣や皇族を後見にもつ「女御」と比べてその身分は低く、帝の「后」ではあり得ない「女」だ。

どれだけ愛そうと、どれだけ愛されようと——それがこの更衣の、この「女」の、「身の程」というものだった。

「その女が……！」

先々から

「帝には私こそ」

などと思い込んでいる女御達は、この更衣を、

「怪しからぬ女」

と見下げ、蔑み、そして、帝からのこの上ない寵愛に嫉妬した。

同じように——と言うべきなのだろうか、それらの女御達よりも身分が低く、この「帝の御寵愛を受ける女」と「同格」の他の更衣達にいたっては、ましてや心穏やかであるはずがない。

朝夕の宮仕えの役目を行うにつけても、他の女たちの嫉妬を搔立てるのみ。

嫉妬深く、意地の悪い他の女たちの恨みを受けることが積み重なったこともあったのだろう、かの更衣はとうとう病がちとなってしまった。

更衣は、病のためかどうにも心細く、実家に戻ることを望むようになりだした。

それほどまでに更衣の心身は疲れていた。

そんな更衣を、帝はますます尽きることがないほど、いとおしく感じた。

女が愛されるには、理由があった時代。

権勢門家の後ろ楯がつき、その女を愛することが男の立身へと繋がるものなのかどうか。

または、誰にも負けぬ類稀な才覚を持ち、詩を知り、歌を詠み、琴を弾き、笛を吹き、琵琶を奏でること、このうえない女であるのか。

そして——美しいのか。

御簾に隔てられ、その奥から微かに漏れる声、ほのかに漂う香の薫り、ちらりと見える裾の色彩の選ばれ方、重ね方……。

それらのことでその女の顔を見定める男たちの上にあって、帝は、女の「美しさ」を知ることのできる男だった。

女たちは、帝のためだけに後宮に仕え、帝のためにのみ「女の扉」を開く。

それ以外に、帝に仕える女がすべきことはない。

そして、許されない。

それは決して否定的なことではなく、「御子を生す」という女たちだけに許された、崇めるべき行為のはじまりである。

帝は、臣下の男どもがするようなことはなされない。

女を求め、求めるまま女の美しさを自らの目で確かめることのできる「男」だった。

それが——帝という至高の栄位に或る者——。

帝は、側近の者たちの忠告や、臣下の批判を気にすることができぬほど、そして、後々にまで世間の語り草となってしまうのではないかと思えるほど、その更衣を全身全霊をもって愛した。

上達部のみならず殿上人が皆、憚ることなく横目に見ても、帝の姿や様子をとても見てはられないほどの気の入様であった。

男が女を愛でることは罪ではないだろう。

だが、帝が女に溺れることは国家、臣民にとって罪となる。

「唐国においてもこの様なことが元で、世が乱れ、邪なことが起こったというぞ」

と、玄宗と楊貴妃の話まで持ち出して、しだいには広く世間でも、

「情けないことだ」

と、人々の苦言の種となった。

更衣はそのような周りの様子を聞くにつけて、いたたまれない気持ちになる。

自分が何と言われようと構わない。どの様な中傷も甘んじてこの身に受けよう。

だが、自分のことで愛する帝が臣下の誹りを受ける、そのことが、自分のことより何よりも悲しく思えてならない。

いっそ後宮をこのまま退下しようかとも思えてくる。

それが、帝にとっては良いことに違いない——彼女はそういう女だった。

ただ、それでもなお、帝の自分への愛情が至上のものと信じ、頼りにすることで、「女」は宮中での生活を続けることができた。

桐壺(2)

かの更衣の父は、大納言の地位にあったが、今は亡い。

その正妻であった更衣の母は、旧(ふる)い家柄出身で教養豊かな人であった。

そのような両親の下で育った更衣の人柄が伺えるというものだ。

更衣が後宮に参内するにあたっては、両親そろって、自分の娘が今の世間でよく聞く華々しい名家の姫君たちにも引けをとらないようと、何から何まで支度を整えたものだが、父は死去し、いかんせん、しっかりとした後見となる政治的、経済的な後ろ楯もない。

やはりどうしても、何か改まって宮中行事や儀式があるときなどは、かの更衣は頼るものもなく、不安な思いをすることもあった。

美しいその女は、ただ美しく、ただ心優しいだけの「女」だった。

だからこそ、「男」は「女」を愛した。

そして、女は子を宿す——宿命が、またも二人を深くする。

前世からの宿縁というものがあるのだとすれば、二人の間のその宿世はどれほどに深いものであるのだろうか。

更衣は、またとなく美しい——玉と光輝くほどの男の赤児(あかご)をついに生んだ。

更衣は「穢(けが)れ」である「子を生(な)す」ために実家のほうに戻っていたが、帝はまだかまだかと、更衣と、かの更衣が生んだ我が子に会うのが待ち遠しくてならない。

産後まもなく、帝は、更衣を急ぎ参上させた。

更衣が連れて参った皇子は、類稀な容貌をしていた。

「さすが、かの更衣と帝の子」と思わせるほどであった。

これは、可愛らしさとは言うまい——美しさ、美麗さであった。

既にいた第一皇子は、右大臣の娘にあたる弘徽殿女御が生んだ人である。

右大臣よりも格位が上である左大臣家からは、今上の帝に娘を嫁がせていない。

となれば、右大臣の後ろ楯を持ったその第一皇子の基盤は揺るぎのないものだ。

そういうこともあって、第一皇子は「間違いなく春宮(とうぐう)となられるお方だ」と、世間から大切にかしづかれていた。

——権威にかしづく者共に。

しかし、かの更衣の皇子の眩いばかりの美しさに並び立つはずもなく、帝は、更衣への愛情に加えて、その皇子を溺愛した。

第一皇子に対しては一通りの愛情を示すだけで、かの更衣の皇子を思いのまま大切なものと愛すること、この上ないほどであった。

常に、かの更衣と皇子を愛し、側におきたいと願って止まない。

更衣というものは本来、帝にいつも付き従って日常のことどもに至るまでをお仕えする様なことは——しない。

許されない。

帝に与えられた局にさぶらい、ただただ帝の御召しの時だけ、帝の下に参上するのだ。

そして自分の身を——子を宿することができる性を持ったその身を、帝に捧げる。

それだけだ——それだけのはずだ。

しかし、かの更衣は違う。

彼女は別格である。

帝の寵愛を一身に受けた「女」への、身に余る恩遇である。

世間の評判もたいそう重々しく、高貴な風格までもが漂うほどで、帝は、時を構わず常に更衣を側に仕えさせ、しかるべき雅楽会の折や、厳かな催しがあるたびに、かの更衣を召し、自分の近くにおかせた。

ある夜などは、かの更衣との深い閨事を終え、寝臥にいたってもなお、かの更衣を局には帰さず、引き続いて側におかせるようなこともあった。

周りのことなどは考えず、無理をしてまでも、常にかの更衣を側に仕えさせていたから、端からは更衣がただの傍づきの女房にさえも見えたが、かの更衣に皇子が生まれてからというもの、いっそう、彼女を大切に思っていることが帝の言動を見ても伺い知れた。

彼女は——特別なのだ。

そう分かった。

かの更衣も幸せだったことだろう。

愛する者に愛され、その愛する者は自分の愛する我が子を共に愛してくれる。

それは「幸せ」と呼ぶにふさわしいものであったに違いない。

この天下で至高の「男」に、「女」としても「母」としても、例えるべきがないほどに愛されている彼女は——幸せであった。

しかし、そのようなかの更衣の幸せを、快く思わぬ者もいる。

「帝は、悪くすると、あの更衣なんかの子供を春宮に御擁立遊ばすおつもりではないだろうか……」

春宮となるべき第一皇子の母である弘徽殿女御の、不信はつるばかりであった。

有力な政治家であればあるほど、自分の娘を後宮に優先して入れることができたこの時代。

右大臣を父にもつ弘徽殿女御は、誰よりも——どんな家柄の女よりも先に後宮に参内し、そして誰よりも早く御子を宿し、生んだ。

この世の「女」のなかで、最上の栄位にあるべき人である。

帝にもっとも愛されてしかるべき人である。

ましてや第一皇子の母であり、いわゆる「后」となる人であった。

帝とてこの弘徽殿女御を蔑ろにすることはできない。

帝の、弘徽殿女御への愛情が——そして第一皇子への愛情がなくなってしまうのかは分からない。

だが、帝も、弘徽殿女御から、かの更衣のことで忠言されれば、すまないとも思い、また煩わしい。

帝の愛するものはただ二人、この上なく美しいかの更衣とその輝くばかりの皇子であったのだ。

ならば、弘徽殿女御が愛したものは何だったのだろう。

帝だろうか。

帝で『あった』のだろうか。

例うべくもないほどの権勢を誇る、己の境涯であったのか。

至高無比な栄位と権威を未来に約束された、我が子たる第一皇子であったのか。

それに伴う己の栄達と己の実家である右大臣家の隆盛であったのか。

それとも――。

そして弘徽殿女御にとっての幸せとは――。

それは、おそらく――全て。

それは、帝の深い愛情だけを幸せと思った、かの更衣の幸せと比べれば、余りにも錯雑なものであったに違いない――。

桐壺(3)

かの更衣は、帝の華々しい加護と愛情を唯一の頼みとしていたが、彼女を貶めるためにあら捜しなどをする者も宮中には多く、彼女自身もか弱いまでに体も病がちで、なまじ帝の寵愛があるために、気苦勞も多いことであった。

かの更衣の局である御殿は「桐壺」であった。

「桐壺」は、内裏の東北に位置し、帝のいる清涼殿からは最も離れた「淑景舎」の和風名で、帝がかの更衣と皇子に会うため桐壺に渡るとなれば、自然、他の女御、更衣達の局の前を素通りすることとなった。

まして、至高の存在たる帝が自ら、足遠い桐壺に、しかも身の程の知れた「更衣」のもとへ絶え間なく渡るとなれば、他の女たちが余りに深い二人の関係に気を揉むのも道理と言えよう。

もし、自分たちも愛されているならば、愛されていると感ずることができれば、女たちの、かの更衣に対する恨みはなかったことだろう。

それが、男と女の「定め」である時代だ。

そして、人に愛されることは、人を寛大にするものだ。

だが現実には、帝の愛する者は、かの更衣と皇子のみ。

他の何人でもなく、それに加えてもない。

それが、女たちには許せない。

自分を愛することのない帝が許せないのでは——ない。

その壮大であるはずの帝の寵愛を一身に受ける、かの更衣が許せない。

かの更衣自身の帝に召されての参上も、あまりにもしきりである時などには、打橋や渡殿のここかしこに、汚物などが撒き散らされ、送り迎えの者たちの裳衣の裾が汚れ、我慢できぬほど、尋常ではないこともあった。

またある時などは、どうしても通らなければならない「馬道」という名の中央の廊下で、何者かに扉の錠を下ろされて通り抜けることができないようにされ、どうかしよう、あちこちを見回ったがどうにもできず、困り果てる——というようなことも少なくなかった。

「あなたには『馬の道』という名のその場がお似合いよ」

とでも言わんばかり……。

事有るごとに数々のやり切れぬことばかり起こり、かの更衣もたいそう辛い思いを続けていた。

——女たちの所業を、裏で糸を引いていた者の姿は、決して見えなかった。

——いや、見えていたに違いない。

——いや、見えずとも、分かる。

——誰もが——

帝以外の、誰もが——。

しかし、それを口にする者はいなかった。

桐壺(4)

帝は、「女」のその様な様子を見るにつけても、いっそう、いとおしく思い、かの更衣とその皇子への愛がますます深まっていく。

彼なりに、かの更衣のことを心配していたのだろう。

清涼殿の別殿である後涼殿に元々あった他の更衣の局を別の所に移すよう命じ、そこをかの更衣に、参上時の控え局として下賜した。

だが、かの更衣は、そのことでますます他の女たちの恨みを買ひ、その恨みは晴らしようがないまでになっていった。

——帝が、かの更衣を愛していたことは、何人にも明らかなことだ。

誰の目にも疑いようがない。

あれほど深く、純然たる愛は他にないだろう。

彼はたしかに彼女を愛していた。

深く、熱く、それにもまして、また、深く。

だが、その余りにも深い愛が——何人にも憚ることのないその愛が、全く別なところで、かの更衣にどれだけ辛い思いをさせているのか、彼は知らない。

帝は、自分の愛を皇子と共に一身に受けるかの更衣が、その愛に幸せを感じ、自分の腕のなかで安らぎを覚えている、その一面しか知らない。

それが、彼女の日常の、あまりにも辛い現実ゆえの安らぎであることを、彼は知らない。

知ろうとしない。

自分が、かの更衣を愛することで、ますます他の女たちの恨みが増し、その全てが彼女に向けられている事実が見えない。

自分の愛では——いや、帝の愛だからこそ、かの更衣を守れないのだ、ということを理解できない。

女たちが、至高無比たる帝に、憎悪や怨恨、嫉妬などという、見るに堪えない女の「部分」を見せるはずがない。

ましてや、帝に怨みを向ける者などいるはずもない。

女たちは、常に美しくあろうとし、自分たちの醜い「部分」を正すのではなく、隠すもの——

心美しい更衣は、

「帝に御心配をおかけすることはできない——」

と何も見せない。

「自分さえ我慢すれば——」

と何も言わない。

一方、帝は、自分には見えぬものの存在を知ろうとしない。

また、それを知らせる心ある者も周りにはいない。

そして帝は——ただ自分が思うままに「女」を愛する。

それが「女」の幸せだと信じて。

思い込んで。

ただただ屈託なく幸せを感じているのは、己一人だけだということに――。

時は過ぎる。

何も変わらぬまま。

帝の愛も、かの更衣の愛も、かの更衣の皇子の美しさも、その周りを取り巻く者共の思惑も、何もかも。

何も解決されぬまま——時は過ぎたのだ——。

かの更衣の皇子が、数えて三歳となったその年、男児が初めて袴を着ける「御袴着の儀」のときのことだ——。

かの更衣の皇子の「御袴着の儀」は、第一皇子のときのものに勝るとも劣らない盛大なものとなった。

皇族の宝物を司る内蔵寮や納殿などの所蔵品の限りを尽くし、しかも、帝自らがそれらを取り仕切る。

並々でない盛り上がり様も当然であった。

儀式の壮大さは、そのまま、かの更衣の皇子に対する帝の寵愛の深さだ。

第一皇子の「御袴着の儀」の盛大さは、言うなれば当然のものであった。

今上の帝にとって最初の皇子——後々には間違いなく春宮となるであろう第一皇子の「御袴着の儀」ともなれば、いやがうえにも盛り上がる。

周りの者たちが盛り上げる。

ましてや、弘徽殿女御しいては右大臣の後ろ楯があるともなれば、その盛大さは、政治的、経済的な裏打ちがあつてのものとなるう。

しかし、かの更衣の皇子は違う。

政治的な後押しもなければ、経済的な援助があるわけでもない。

母たる更衣の身分は余りにも低いまま——。

にもかかわらず、第一皇子のものと引けをとらないほどの儀式が執り行われるのは、帝の力、権威の成せる技である。

そして、その力の行使の大きさは、かの更衣の皇子への愛情の深さに他ならない。

そしてそれは——かの更衣への愛であった。

帝の、かの更衣への愛は三年経った今でも変わることはない。

そして、これからも変わらないに違いないものだ——。

「それにしても——」

と、宮中に仕える誰もが——どの男もが、どの女もが、思わずにはいられない。
——何も変わらぬまま——時は過ぎた——。

かの更衣に対する世間からの——後宮の女たちからの誹(そし)りは、いまだ多い。

しかし、変わっていくものもある——かの更衣の皇子が——。

かの更衣の皇子がすすくと成長していく容貌、気立て、性格は「世にも類稀なものだ」と、誰もが口にするほどである。

「なんと美しい皇子だろうか——」と——。

愛らしく、美しく——。

「帝の御寵愛も『さも道理』」と——。

かの更衣を妬み続けている、他の女たちでさえ、

「あの桐壺の更衣の子供なんか——」

と口にしながらも、その愛らしい皇子の姿を見てしまえば、皇子のことまでは憎み切ることはできない。

彼は「かの更衣の皇子」である前に「帝の子」なのだ。

この世でただ一人、かの更衣に劣らぬ寵愛を、帝から受けている「帝の子」——。

「ものの道理が分かっている」

といったふうな学識者でさえも、

「この様な方が、この世にもいらっしゃるものなのか……」

と、余りの美しさ、愛らしさに驚き、呆れるほど目を見張ってしまう。

それが、かの更衣の皇子の——「帝の子」の——美しさなのだ。

桐壺(6)

その年の夏、かの更衣は、ふとしたことから病にかかってしまった。

かの更衣は、病の静養のため宮中を退出しようと思ったが、彼女や皇子を常に傍においておきたいと願う帝は、暇を与えなかった。

ここ数年来というものの、かの更衣はいつも病がちであったので、帝には、かの更衣が特別重い病に罹った様には見えず、

「このまましばらく宮中に留まり、様子を見よ」

と、退出を引き止めるばかりだった。

だが、かの更衣の病状は日に日に重くなるばかり。

回復の兆しなど見えず、五、六日もせぬ間に病は悪化し、かの更衣はひどく衰弱してしまった。

動けないまでになってしまった、かの更衣に代わって、その母が涙ながらに、

「どうか、娘の退出をお認めくださいますよう」

と帝に嘆願したので、帝もようやく事の重大さを理解し、ついに、かの更衣の退出を認めるにいたった。

だが、「病気退出」ということで、かの更衣が内裏内を渡る時などに、もし、例のごとく行列に何かしらの嫌がらせを受け、とんでもない恥をかくことがあったら――

また、もし、その時に自分の皇子が同行していたとなれば、我が子の皇子としての体面が傷つけられるかもしれない――

などと思うと、かの更衣は不安になり、病の身でありながら、我が子のことに心を砕かずにはいられない。

帝の膝下に残れば、幾ら何でも、あの美しい皇子にまでは危害が及ぶまいということで、かの更衣だけが忍んで退出し、かの更衣の皇子は宮中に留まることとなった。

あの子は類稀な「帝の子」なのだから――この上ない御加護がある――。

かの更衣は、皇子の愛らしさを信じ、帝のこの上ない愛が、この皇子に注がれるであろうことを信じた。

彼女もまた――帝を愛し、信じていたのだ。

宮中では十分な静養もできず、また、万が一の「死の穢れ」を用心して、病となった者は内裏を退出することがしきたりであったから、帝も、一度許しを出した以上、かの更衣をそういつまでも宮中に引き止めることはできない。

彼にとって、かの更衣の「死の穢れ」などを考えることも、彼女の死が想像されて悲しいことだが、帝としての立場を考えれば致し方ない。

そして、致し方ないと思いながらもなお、かの更衣を自分の傍から一時も離したくはないと思いつける。

見送りさえもままならぬ心もとなさを、言葉にすることもできない。

艶やかで美しく、可愛らしい様子であったはずのかの更衣は、たいそう顔も痩せ細り、思い通

りにならない我が身を、しみじみと悲しく思いながら、また、彼女もそれを言葉にすることができない。

かの更衣の意識が、あるかないか分からぬほどに薄れがちであるのを見るにつけても、帝は、後先考えず様々なことを、泣きながら、二人の間で約束しようとした。

——貴女が、この約束を果たすまでは、私のもとを去ってはならないのだよ、と——。

しかし、かの更衣は、それに答えることさえできない。

眼差しも、たいそうだるげで、目は虚ろ。

日頃からか弱げな様子の人であったが、それにもまして、いっそう頼り無く、意識もはっきりしないまま臥してしまっている。

愛する人との契りに、答えることができない我が身を、嘆くが如くに——。

その様な「女」の様子を見るとますます、帝は、

「どうしたらよいのだろうか」

と思い迷い、取り乱すのだった。

悲しみに沈みながらも、帝は、輦車(てぐるま)を、かの更衣の退出のために出すようにと宣旨し、退出の準備を進めさせた。

輦車——手押車は、親王、大臣、女御、僧などのみが、宮中の出入りに使用を特別に許されていたものであるから、「更衣」の女にとっては身に余る光栄と言えた。

またそれを、中務省を通すことなく勅命した——宣旨した——というのだから——。

帝の寵愛を受け、その中を忍びながら退出していく「女」の姿は、どれだけいとおしく見えたことだろう。

そして、その愛に苦しんでいたのは「女」自身。

また、それを知るのは「女」のみ——。

帝は、輦車を出すように宣旨した後でも、更衣の局に再び入り、やはりどうしても更衣を手放そうとしない。

「いつだったか……

死に向かった、限りある命の道であっても、どちらが遅れることもなく、ましてや先んじることとはなく、共に行こうと私と約束なされたのに……。

いくらなんでも私を残して、里に帰ってしまうなんて」

と、帝が言うのを、かの更衣もとても悲しく思えて、

「——限りとて別れる道の悲しさに

いかまほしきは命なりけり——

『定め』ということで、貴方と別れる死出の道の悲しさの中にあってもなお、

私が欲しているのは、死出の道ではなく、

やはり、貴方と共に生きる道を行ける——生ける命であります。

こんなふうになると存じておりましたら、このようなことには——」

と、息も絶え絶えに呟く。

他にも何か言いたげな様子であったが、とても苦しげで、体もだるげであり、声に出せないようであった。

「こうなれば、このままこの人の、生きる死ぬとの、ともかく全てを見届けよう」

そう、帝は思う。

本来、最も「死の穢れ」を忌む宮中では、その様なことがあってはならない。

だが、帝には、その様な宮中のしきたりなどより、この愛する人を傍で見守ることのほうが、大切に思えた。

そう思えるほど、帝の心は切迫している——焦っている。

愛する者に迫り来る「限り」を目の前にして——。

「本日から始める予定の治病祈禱を、しかるべき僧の方々から受けるのは、すぐ今夜からですので……」

と、かの更衣を退出させることができずにいた周りの者たちが、帝を急き立てる。

かの更衣の傍を離れることは堪らなく思えるけれど、祈禱を受けなければ本当に死んでしまう、と考えるといたたまれず、帝は、ようやくのことで、かの更衣の退出を許した。

——愛する者が去っていく——

愛し合ったまま——

愛する私を残したまま——。

帝は胸がぐっと塞がってしまった様に思えたが、それでも少しもうとうとと微睡むこともせず、かの更衣のことだけを思いながら夜を明かすつもりであった。

見舞いに行かせた勅使が、かの更衣の実家に行って戻ることもしないうちから、しきりに、気掛かりな自分の気持ちを口にせずにはいられず、落ち着かない。

何度も勅使を出したりもした。

そして、時は音も立てずに過ぎ去り、人の思いをかき立てる——。

そして——無いならば——と願った訃報が届く——。

「夜中を少し過ぎたころに……息をひきとりなさってしまいました……」

かの更衣の家の者が、そう泣き騒ぐのを聞き、勅使がはかない思いをしながら帰り、伝えたのだ——。

「かの更衣が永逝された」——と。

桐壺(7)

帝の心は——千々に裂かれる——。

——なぜだ——？

——私と共に道を行くと、あれほど約束したではないか——。

帝は、叫ぶ。

——私が、あの時、あの人を引き止めたことで、治るとも知れない病を、むやみに重くさせてしまったのではないだろうか——？

——死の穢れが何だというのだ……愛する人を守り続けることもできないなんて……やはり、あ
の人の傍についているべきだった——！

帝は、悔やむ。

——何の前世が、このようなことをさせるのだ——！

——私たち二人に何かの罪があるのなら、私一人が何としてでも贖(あがな)うものを——！

——神よ——仏よ——！

帝は心惑い、何も考えることができぬまま——閉じ籠もった。

自分のなかに。

自分の思い出のなかに。

あの人と過ごした、思い出のなかに。

あの人が残した皇子の、面影のなかに——。

皇子の美しさ、愛らしさに、今は亡きかの更衣の面影を見ていたのか——。

帝は、皇子を、母親の喪中であるにもかかわらず、傍において見ていたいと思っていた。

しかし、こうした実母の喪中にある者が宮中に残るのは、いままでに例がない。

七歳以下の子供は親の喪に服するには及ばない、ということになったのは、延喜七年、西方の
暦で九〇七年のことであったというから、それ以前のことだったろうか——。

周りの者の進言もあって、喪に服する間、皇子は宮中から退出することとなった。

皇子である若君は、何が起きているのか分からない。

母の死を実感することができない。

母の不在を、永遠のことなのだと知ることができない。

仕えている女房たちが泣き惑い、普段は心強いはずの父上たる帝までもが、涙を絶え間なく流
しているのを、若君が不思議そうに見上げている。

ただでさえ人の死別は、悲しくないというようなことがあるはずなく、もの悲しいもの。

それに加えて、若君のその様な無邪気な姿を見ていると、いっそう深い悲しみを呼び、言うべ
き言葉もない。

かの更衣の亡骸を、そのままにして実家に置いておくこともできず、しきたりというものもあ
るので、世間の通例通り火葬にして、墓に納めることとなった。

かの更衣の母である北の方は、

「同じ煙になって、娘と一緒に昇って消えてしまいたい……」

と、泣き焦がれる。

本来、葬儀には男家族だけが見送るものであったが、男親である大納言が既に亡くなっていたということもあってか、野辺送りの女房の牛車に後から乗って葬列につき従った。

愛石という地で、葬儀は行われていた。

その、厳かに葬儀が執り行われているところに到着した北の方の心の中は、どんなものであったのだろう――。

娘に先立たれた母親の気持ちは――。

愛する娘の、この上ない幸せと苦しみを知っていた思いは――。

北のかたは、

「この虚しい御亡骸を見ていると、

『まだ生きていらっしゃるのでは……』

と思いますけれど、そういうことも、とても虚しく、この御亡骸が灰になっていかれるのを見
申し上げることで、

『今は亡き人なのだ』

と、きっぱりと諦めることにしましょう」

と、冷静な様子で周りの者に話していたが、「更衣」であった我が娘に対し、その別れの際にも敬語を使う、母の姿は痛々しい。

そして、拾遺集にある、

「――燃えはてて灰となりけむ後にこそ

人を思ひのやまぬ期にせめ――

燃え果てて、灰となってしまった後だからこそ、

止むことのない、あの人への思いもこれを最後としよう」

という歌を、無意識のうちにも織りまぜながら、自然と口に上ってくるのを話すのを聞けば、この北の方の教養の深さが知られるというものだった。

さすが、かの更衣の母君、と――。

しかし、気丈に振る舞っていた北の方であったが、やはり、その場を去るとなると、車から落ちんばかりに泣き崩れてしまう。

「だから言わないことじゃない……」

と、女房たちも、北の方の扱いに手を焼くほどであった。

それからしばらくして、かの更衣の実家に、内裏の帝からの使いがあった。

かの更衣に「従三位」が贈られるということとなり、勅使が来臨し、
「『三位の位』を下賜する」

と和風名にした宣命を読みあげたのだった。

それを聞けばまた、かの更衣が忍ばれて悲しく思えてくる――。

かの更衣を、結局最後まで女御として呼んでやれなかったことが、帝には心残りで無念に思えたのであろう。

生前、正四位上であったかの更衣に、

「せめて、もう一階級上の位を――」

と贈ったものであった。

傍に居てやれなかった自分の代わりには、ならないことを知りながら。

このようなことしかできない「至高無比な帝」である自分を、呪いながら――。

この位の贈与についても、かの更衣を憎む女は、未だに多かった。

心醜い女は、他人の死では思い直さないもの――。

しかし、中には「ものの情理」というものを知った女御や更衣もいた。

かの更衣を、今更に思い出せば――その仕種、容貌が美しかったこと、気立てが素直で欠点がなく――今思えば、余りにも憎めない人であった――。

帝の、かの更衣に対する見苦しいまでの寵愛故に、冷たくあしらい、また、嫉妬してしまった。

何と浅はかなことであったのか――。

悔やんでも既に遅く、その悔やみも、また、浅い――。

女たちの関心は、すでに他のところにある。

次に帝の御寵愛を受ける者は誰なのか――

――私なのか――。

――女たちは知らない。

帝の心は、かの更衣の思い出のなかに――かの更衣が残した若君の面影のなかに――閉じ籠もっていたことを。

その閉じ籠もった帝の心を開け放つのは、いまだ姿を見せぬ運命の人であることを――少なくとも、あの人には似ても似つかぬ、心醜い己達などではないことを――。

弘徽殿女御はどうであったのだろう。

かの更衣の死に、喜びを感じただろうか。

帝の愛を再びとりもどそうと思っただろうか。

それとも――。

それとも、自分の第一王子が春宮にさえなれば――。

かの更衣の若君が、それを邪魔さえしなければ――。

そう思っていたのだろうか――。

どの思いなのか――全ての思いなのか――どの思いでもないのか――。

誰も、知らない。

かの更衣の人柄が奥ゆかしく、情け深い心であったことを、帝づきの女房などは、やはり帝にさぶらう他の女御や更衣と比べては、かの更衣を慕い、その死を惜しんだ。

「――あるときはありのすさびに憎かりき

なくてぞ人は恋しかりける

生きていたときは、そこで生きていたというだけで憎かったあの人も

亡くなってしまった今では、恋しく思える。」

という歌の「なくてぞ」とは、こういうことを言うのかと思えた。

――そして――日々は過ぎていく――。

――若君は少年へ、と――

青年へ、と――

「男」へ、と――。

――だが――まだ――その日は遠い――。

日々は、いつの間にか過ぎていく——。

はやく過ぎてほしいという願いも、過ぎてほしくないという願いも、どちらも受け付けぬまま、ただただ、日々は過ぎていった。

かの更衣がこの世を去った後の七日毎の法要などでも、帝は、濃やかに見舞った。

彼はどちらだったのか——はやく過ぎてほしいと願ったのか——過ぎてほしくないと願ったのか——。

時を経てもなお、帝は、その悲しみをどうしようもない。

時を経てもなお、他のどの女にも「夜の御伽」を命じることはない。

女の体に慰みを求めない彼は——未だ、かの更衣を愛していた——。

そんな帝を見るにつけても——露によってか——涙によってか——しめじめとした秋になったのように思われる。

「死んだ後まで、人の心をむしゃくしゃさせる御寵愛だこと」

と、弘徽殿女御は、相も変わらず手厳しい。

帝は、第一皇子の姿を見ていても、かの更衣の若君の愛らしさ——面影だけが思い出されてしまう。

弘徽殿女御には露顕しないよう気を配りながら、腹心の女房や乳母などを、今は亡きかの更衣の実家に遣わし、若君の様子を見てこさせた。

——己が見に行ってはやれぬ——父だというのに——あの若君は、あの人とのあいだに生まれた、愛すべき我が子だというのに——。

——愛する者の傍にいてやれぬ——それを私は繰り返している——。

帝の悲しみは、あまりに深かった——。

秋に入って——「野分け」が吹くようになった——

時の流れを思わずにはいられない。

にわかに肌寒くなった夕暮れ時、帝はいつもと違って思い立つことが多く——

何かを思いきったように、靱負の命婦(ゆげひのみょうぶ)という者を、かの更衣の実家に遣わした。

帝自身は——と言えば、遣いの者を出した後、夕月が浮かぶ夜の美しい頃合いに縁に出て、そのまま物思いに耽っていた。

——あの人がいた頃は——。

やはり、帝が思うことはただ一つ——。

——こんなふうに見える月が出ている夜には、管弦を弾き遊んだりして——。

——そうすると、あの人は、それに合わせて素晴らしい琴の音をかき鳴らしたものだ——。

——さりげなく呟く言葉も——あの美しい姿が月光に浮かび、今この私の身に寄り添うように思われることも——。

——今となつては幻想で——闇夜の現(うつつ)にも及ばない——。

「——うば玉の闇のうつつはさだかなる

夢にいくらもまさらざりけり——

闇のなかの逢瀬は、夢のものに勝るものでは無かつた」

たしか古今集にあつた、そんな歌が——心をよぎる——。

——あの人に逢いたい——。

——が、それは叶わぬ——叶わぬなら、せめて——。

帝は、思いを決めていた。

帝の遣いに発った鞍負の命婦が、かの更衣の邸に到着し車を門に引き入れてみると、邸に漂う霧囂気は、何とも言えず、もの悲しいものだった。

かの更衣の母君でこの邸の主である北の方は、夫である大納言を既に亡くし、女一人のやもめ住まいであったが、更衣一人を盛り立てるために、とにもかくにも手入れして、見苦しくないようにして暮らしていたはずだったのだが……。

しかし、今では、

「——人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道にまどひぬるかな——

子を持つ私の心は闇であるわけではないはずですが、

子を案じて、どうしていいかわからないのです」

と、後撰集にある歌のように、娘の死の悲しみに闇と沈んで泣き悲しんでしまっていたのだらうか、草も高くなり、台風の野分けの風にたいそう荒れてしまっていた。

月の光ばかりが、八重葎——八重に繁った草にも遮られること無く、差し込んでいるのみだった。

貫之集にある、

「——とふ人もなき宿なれど来る春は

八重葎にもさはらざりけり——

訪ね来る人もないわが家であるが、めぐり来る春だけは

八重に繁った雑草にもかまわずやって来るのだ」

という歌の、「来る春」を、今は秋であるから「月影」とでも言いかえるべき有り様——。

鞍負の命婦は、邸の「晴れの場」である南面に降り立った。

さっそく北の方に会ったが、北の方は涙に噎んで、すぐには話もできない。

「夫や娘はもう死んでしまいましたのに……

私だけが今まで生きておりますことが、とても情けなく……。

こうやって、貴女のような弔問の勅使が、あの様な蓬の草の露をかき分けて訪ねていただきますれば、きまりが悪い思いも……」

北の方は、耐えられぬ思いに泣き臥せた。

「『お訪ねすると本当に気の毒で、胸がつかれる思いでした』

と、知り合いの典侍が申しておりましたけれど……

本当に……

私のようにものの情けなどを知らぬ者でも、堪えがたい思いが致します」

鞍負の命婦もやっと涙を堪えて、帝の言の葉を伝えた。

「『ここしばらくは、夢ではないかと思ひ悩んで……最近ようやく心も静まってきましたが、しかし却って、思いが冷めるはずもなく、悲しみに堪えることもできません。

(どうしたらいいんだろう)

と試してみても、相談する人も私の周りにはおりませんから、内々に宮中においでなされませ

我が子——若君のことも、とても気掛かりですし、あの子が涙がちの所で暮らしているのも労しく思えます。

できるだけ早くいらして下さい』

と、帝は最後まではっきりとおっしゃることもできず、涙を抑えながら……。

それでも、周りの者が

『お気の弱い』

と見るかも知れぬと、人目を御憚りになさらない御様子が、御労(おいたわ)しゅうございます。

結局、最後まで御言葉を承れない有り様のままで、こうして参りました』

と言って、帝からの書状を渡す。

「我が目は涙で見えておりませんが、このように恐れ多い御言葉を光として、拝見いたしましたよう」

北の方は、ゆっくりと文を開いた。

「——程なく時がたてば、少しは気が紛れることもあろうかと、心待ちに過ごす月日が経つにつれて、どうしても我慢できないこの思いは、不条理なものに思えます。

『幼いあの子はどうしているんだろう』

と思いやりながら、共に——傍に居てやって養育してやれないのが気掛かりでなりませんから、今はやはり、若君を今は亡きあの人形見として、一緒に宮中に参られよ——」

などと、文には情を込めて書かれている。

——あの子の面影を感じさせるものが——

あの子の思い出を語り合う人が——

宮中には——私の周りには余りにも少なすぎるのです——。

帝の叫びが聞こえてくるよう——。

そして、その終わりには、

「——宮城野の露吹きむすぶ風の音に

小萩がもとを思ひこそやれ——

萩の名所の宮城野で、露まじりに吹く風の音で小萩のことを思いやるように、私は宮城野ならぬ宮中で、露にもならん涙ながらに、秋風のなか、我が子のことを思っているのです」

と、古今集の、

「——宮城野のもとあら小萩露を重み

風を待つごと君をこそまで——」

を準えて詠まれていたが、北の方は、涙によって最後まで読み尽くすことができない。

それでも、涙を堪え、言葉を紡ぎだす。

「『自分の命の長々しさに、自分でも実に辛く思い知っております。

——いかでなほ在りと知らせじ高砂の

松の思はむこともはずかし——

こんな歌が、確かありましたけれど、私もこの歌と同じ様に、高砂で千年生きたという老松に（お前はまだ生きているのか）

などと思われるかもしれぬ……と、恥ずかしく感じ、身が縮む思いをしているのです。

こんな私が、まして内裏に参上いたしますとなれば、あそこには私にとって、色々と気がねする事も多くありますので……。

ですから、かような畏れ多い仰せを、度々承りましても、どうも私自身は参内を思い立てそうにはありません。

決心がつかないのです。

幼い若君がどこまで御理解されているのかは分かりませんが、若君自身は参内したいとお急ぎのご様子で……。

父上である帝をお慕いするのも当然だとは思いますが、若君が宮中に参内するとなれば、私は共に参るわけにはいかず……

そんな若君の気持ちを悲しい思いで拝見しております……』

と、内々に、私が思うことを帝に御報告下さい。

私は娘に先立たれた不吉な身の上でありますれば、若君がこの様なところで私などと共に御暮らしになっているのは、憚り多く、恐れ多いことだと、分かってはいるのですけれど……」

北の方は、涙に暮れながらも——ただ虚しく生き長らえた己の情けなさに準えながらも、はっきりと若君との参内を拒絶していた。

桐壺(11)

帝が望んでいるものが何であるのか——かの更衣の面影をもった美しい若君であることを——北の方は知っている。

帝が本当に望むものはただ一つ——かの若君のみ——。

そんなことは重々承知していた。

祖母である自分がともに参上することができないからといって——若君を手離すことが堪えがたいからといって、若君の参内を断ることの正当な理由になるとは思っていない。

若君一人を参内させればよいことだ。

帝の「おぼしめす」ことなのだから。

「貴女も一緒に、宮中に来られよ」

と、年老いた自分にまで誘いを掛ける、帝の深い優しさと悲しさも知っている。

理解できる。

帝は、心から若君のことを案じているのだ。

帝は、若君を愛し、一身に見守ろうとしているのだ。

同じ過ちを繰り返すまいと、心に決めているのだ。

そして、本当ならば帝の下にあったほうが、若君が幸せなことも分かっている。

若君自身も、それを望んでいるのだから——。

——しかし——北の方の思いは決まっていた——。

——内裏などに——宮中などには若君はやれぬ——。

——娘を死なせた宮中などには——。

——たとえ、この上ない帝の御加護があろうとも——。

——我が娘はその愛に苦しんだではないか——。

若君は既に床についていた。

若君の、今の気持ちを聞き知ることは——できない。

「若君を拝見して、詳しくその御様子を帝に上奏致したいところですが、帝も待たれておいででしょうし。

夜も耽ってまいりました」

靱負の命婦は帰りを急ぐ様子だった。

それに構わずに、北の方は話を続けた。

「我が子のことを思い悩んだ心の闇のなかにあって、堪えられないこの気持ちの一部だけでも晴らしたいと思いますから、今夜のような公の時だけでなく、個人的にも、気軽にいらしてくださいね」

靱負の命婦は、北の方が急に老け込んだように見えた。

——この人も、人恋しいのだ。共に語り合う人が——。

北の方は靱負の命婦に語り続ける。

「ここ数年来は、貴女にも、若君の御誕生や『御袴着の儀』など色々と晴れがましい機会にお立

ち寄りいただいておりますものを……

今ではこのような弔問のお遣いでお会いするようになるなんて……。

かえすがえすも無情なこの長い命です……。

娘は——亡き更衣は、生まれたときから両親して望みをかけていた子で、夫の故大納言は臨終の際まで、ただただ

『この人の——私たちの娘の、宮仕えの希望を必ず遂げさせてあげておくれ。

わしが死んだとしても、情けなく挫け、諦めるようなことがあってはならぬぞ』

と、何度も私に忠告しておかれましたので。

私自身は、

(はかばかしい後ろ楯になる人もいない宮仕えならば、かえってしない方がましなのではないだろうか)

と思わぬではなかったのですが、

『故大納言の遺言に達えることになっては……』

とだけ思い続け、娘を御奉公に出し、入内させました。

そして、帝の身に余る御寵愛——。

帝は全てにおいて有り難く——。

そのような御寵愛のなか、他のお妃の方々による、人並みでない恥に堪えながら、亡き更衣も宮仕えをなさっていたようですけれど、ますます人の嫉みは深くなるばかりで、心安からぬことが多くなりなさいまして……。

若くして、その寿命を全うできず、このようなことに……。

帝の御寵愛が、かえって辛く、恨めしく——

いえ、ほんとに、畏れ多いことだとは存じております。

存じておりますけれど——」

北の方は、自分の話が、帝に対して恨みがましくなったことに気付き、最後に付け加えた。

「これも理性を失った、子を思う親の心の、闇の中での乱れでありますれば——」

涙に噎びながらのその弁解も、北の方の本心を覆うことはできない。

帝がしっかりと娘を守ってくれれば——。

帝が、娘が恨みを買わぬよう、他の女も愛していれば——。

帝が娘を愛さなければ——。

そして——。

娘が更衣ではなく女御であれば——。

娘に確かな後ろ楯があれば——。

大納言が生きていれば——。

私が無理をしてまで娘を入内させなければ——。

——悲しみは自分の下へと戻ってくる——。

娘の入内は——そして帝の妃となることは——帝の子を生ずことは——「家」の隆盛に繋がる

。

大納言であった夫は——大臣という地位がすぐ上にあった「男」は——それを望んでいた。

それが、この時代なのだ。

娘への愛情が、立身への願望に繋がっていることは少なくない。

娘と父は運命を共にするもの——。

かの右大臣を見よ。

娘なる弘徽殿女御は帝との間に皇子をもうけ、その第一皇子は春宮となるべき人であり、近い将来の隆盛を約束されたも同然。

格上たるはずの左大臣家と肩を並べんまでの勢いではないか。

——それが、現実だ——。

そして、その現実のなかに娘を奉じ、その若く美しい命を奪ってしまった——。

北の方は己を恨む。

「同じ過ちは繰り返すまい——」

と誓う。

——帝にとっての「同じ過ち」と、北の方にとっての「同じ過ち」とは、違っていた——。

一方は、もう一度やり直したいと望み——。

一方は、もう二度と轍は踏むまいと恐れた——。

そして二人は同じように——かの若君の幸せを望んでいた——。

そして、二人の悲しみは同じように深い——。

——いつの間にか、夜はすっかり更けてしまった——。

鞆負の命婦も、北の方の心情を察してか、帰ることさえ一時忘れ、言葉をかけた。

「帝も、同じ御気持ちでしょう。」

帝は

『自分の心ながら、強引に、周りの者が目を見張るほど、あの人を愛したが、（はじめから長く続くはずのない運命だったのか）と、今では却ってその愛が辛い、あの人との縁だった。

ほんの僅かの間でも、周りの者の心を傷つけるようなことはないと思っていたが、ただ、亡き更衣一人とのことが原因で、「帝」としての本分も忘れ、本来は、そんなことがあってはならない——他の妃に恨みを持つようなことがあってはならない妃たちが、亡き更衣に恨みを向けるようなことをしてしまっ——その恨みを負ったかの更衣に、こうして先立たれて……。

気の静めようもなく、亡き更衣を愛していた、あの頃にもまして、この深い悲しみで人目にも恥ずかしい有り様になってしまったにつけても——何の前世の因縁なんだろうかと思えるよ——』

と、常々おっしゃっては、いつも涙がちでいらっしゃるんですよ」

鞆負の命婦も涙に噎び、最後のほうは言葉になっていない。

泣きながら、それでも、

「夜も、たいそう更けてまいりました。

今夜のうちに戻りますれば、これにて」

と言って、帰り路を急がなければならない。

夕月が入った辺りの空が、清げに澄み渡り、風はとても涼しくなって、草むらの虫の鳴き声が——泣けよ——と勧めているふうなものも、実にこの場を去りがたい草原であることか——。

「——鈴虫の声の限りを尽くしても

長き夜あかずふる涙かな——

鈴虫は声のかぎり泣き尽くし、私もこの長い夜の間もずっと、
尽きることのない涙を、鈴を振るように、降らしているのです」

鞆負の命婦は、後ろ髪引かれる思いで、車に乗れない。

既に、奥へと引き込んでいた北の方は、

「——いとどしく虫の音しげきあさぢふに

露おき添ふる雲の上人——

虫の音のように泣き過ぎず、こんな草が繁ったような邸に
いっそう露涙をお添えになる、大宮人ですこと。

そんなに心優しくされては、この涙を貴女のせいだと申し上げてしまいそうで——」

と、側仕えの女房に伝言させた。

普通こういう場合には、風情のある土産を渡すものであるが、そういう時期でもないのに、ただ亡き更衣の形見ということで、このような入り用の折もあろうかと残しておいた装束一揃い——

—髪上げのときの簪(かんざし)などの調度品のような物を、帝あての返事の手紙に添えた。

かの更衣に仕えていた若い女房たちは、主人を失った悲しみは言うまでもないが、宮中の生活を朝夕過ごし慣れていたので、今の生活がたいそう寂しく、宮中の華々しさが恋しく思えてくる

。

帝の御様子を思い出しては、懐かしく思われ、若君を早く参内させるようにと、北の方に勧めるけれども、

「この様に不吉な者が御一緒に参上するのも、世間の聞こえが悪いでしょう……」

とか、

「若君を拝見することができなくなるのも、どうも気掛かりで……」

などと、靱負の命婦の時と同じ話を繰り返すばかり。

どうしても、思い切って参内する決心がつかないようであった。

桐壺(13)

靱負の命婦が内裏に夜遅く帰ってみると、帝はまだ寝臥に入っておらず、そんな様子も勞しく見える。

目の前に広がる中庭の壺前栽の趣は、まさに酣(たけなわ)。

しかし、帝はそれを見るような素振りを見せるだけで、ひっそりと、奥ゆかしい女房ばかりを四、五人傍に控えさせ、物語などをさせていた。

近頃では、白樂天の「長恨歌」の一場面を、亭子院——元の宇多天皇が屏風絵に描かせたという、玄宗と楊貴妃のことを、宇多天皇が伊勢や貫之たちに詠ませた和歌や、原典である白樂天の詩などの、ただ、その悲哀の部分だけを、明けても暮れても口癖のように繰り返していた。

帝は、玄宗と楊貴妃の悲恋に——愛する者と死別してしまった玄宗に——絶世の美女と歌われた楊貴妃に——自分を、自分たちを重ねていた——。

そして今宵も、帝の朱唇は「長恨歌」を紡ぎだす——。

——廻 眸 一 笑 百 媚 生
六 宮 粉 黛 無 顔 色——

あの人の美しさは、そんなものではなかった。

さらに美しく——もっと可憐で——。

——承 歡 侍 寝 無 閑 暇
春 從 春 遊 夜 專 夜
漢 宮 佳 麗 三 千 人
三 千 寵 愛 在 一 身——

私もさぞ愚かな、情けない男に見えたことだろう。

だが、私はそれほどにあの人を愛したのだ——。

——蜀 江 水 碧 蜀 山 青
聖 主 朝 朝 暮 暮 情
行 宮 見 月 傷 心 色
夜 雨 聞 猿 腸 斷 声——

私の悲しみは、それよりも深い——重い——。

——君 臣 相 顧 尽 霑 衣——

私と共に——私と同じくらい——涙を流してくれる者は——いない——。

——秋 雨 梧 桐 葉 落 時
西 宮 南 内 多 秋 草
落 葉 滿 階 紅 不 掃——

人を亡くし——人を思う——そんな季節は、やはりいずれの時代でも——この私と同じ様に——「秋」なのだろうか——。

——為 感 君 王 展 轉 思
遂 教 方 士 殷 勤 覓

排 空 馭 氣 奔 如 電

昇 天 入 地 求 之 遍——

もしも、あの人と会えるというならば、私とて如何なることも惜しむまい。

たとえそれが、虚しきことだと知っていても——。

——猶 似 霓 裳 羽 衣 舞

玉 容 寂 寛 涙 瀾 干——

あの人は楽土でどうしているのだろうか——。

——在 天 願 作 比 翼 鳥

在 地 願 為 連 理 枝——

私が望むものは——違う——。

そして帝は、三十四歌仙にも挙げられ、長恨歌屏風絵に描かれた玄宗と楊貴妃の思いを歌に詠んだ、歌人「伊勢」に思いを馳せる——。

この上ない美貌と、才覚を持った彼女——伊勢は、時の帝、宇多天皇の「后」温子に仕えていた、受領格の——そう身分が高いとは言えない——女であった。

父藤原継陰が伊勢に赴任した経験があることから、そのような名前で呼ばれていたらしいが、詳しいことは分からない。

もちろん帝自身も直接知るわけではない。

伊勢は、皇后温子の女房を務めながら、その兄である仲平と関係を持ち、その愛が破れた後、皇后温子の女房でありながら、その才覚と美貌が宇多天皇の目に留まり——

宇多天皇の子を宿した——。

が、その子は生まれてすぐこの世を去ってしまう。

彼女は、知っていたら——

叶わぬ恋の虚しさを——

結局は、添い遂げることのできない愛の悲しさを——

知っていたのだ。

思い知ったのだ。

宇多天皇の愛を受け、更衣としての待遇を受けてもなお、皇后温子に仕え続ける道を選んだ彼女は——。

だから、宇多天皇の第四皇子である敦慶親王と、恋に落ちた——。

叶わなかった恋の虚しさを埋めるために——

添い遂げる愛の喜びを知るために——。

知っていたのだ——

玄宗と楊貴妃の思いを——悲しみを——

己自身が——。

白楽天はその知性で二人の思いを理解し、想像し——

一方、伊勢はその心で二人と同じ悲しみを知り、感じた——。

伊勢は、その類稀な才覚で玄宗と楊貴妃の思いを——悲しみを想像したのではない。

知っていたのだ。

感じていたのだ——。

帝は思う。

「私は愛する人を失って初めて、その思いを——悲しみを知り——」

——彼女はその思いを——悲しみを始めから知りながら、感じながら——

その虚しさを承知の上で——人を愛したのだ——。

そして、その虚しさを癒すため——また、人を愛した——。

そんな彼女が詠んだ「玄宗と楊貴妃の思い」は、白楽天のものとは一線を画す——。

「をとこ

——みし人にまたもやあふとむめのはな

さきしあたりにゆかぬひそなき——

かえし

——ひとたひにこりにしむめのはなゝれは

ちりぬときけとまたもみなくに——」

帝は、そんな、伊勢という「女」を、身近に感じる。

時を越え、自分の気持ちを分かってくれるに違いない人の存在を——。

——そういえば、紀貫之(きのつらゆき)はどう詠んだのだったろうか。

たしか——。

「只今戻りました、陛下」

鞆負の命婦の声が、思いの中にあった帝を現実へと引き戻した。

目の前にかしづく鞆負の命婦に、暫しぼんやりとしてしまったが、帝はすぐに我に返った。

「それで、どうであった？」

帝は、「帝」らしくあろうとしていた。

一方で、「帝」になり切れぬ自分を知りながら――。

帝は、亡き更衣の実家の様子を細々と訊ねた。

鞆負の命婦はそれに一つ一つ答えていく。

――亡き更衣の実家は、見た目にも雰囲気も、もの悲しく荒れ果ててしまっていたこと――。

――北の方の痛ましいまでの様子、そして、彼女には、若君を内裏に参内させる意思がないらしいこと――。

それらを、密やかに話し、北の方に預かった返事の手紙を帝に渡した。

それを読むと、

「実に畏れ多いことで……

どうしてよいものか、心の置場も分からぬほどです。この様な御達しを受けますと、心惑い、暗闇にいるように思い乱れまして――。

――荒き風ふせぎしかげの枯れしより

小萩がうへぞ静心なき――

荒々しい風をふせいでいた木が枯れてしまって、

その木陰にいた小萩のことが気になり、心穏やかではありません。

若君を見守っていた、かの更衣が他界してからというものは、

幼い小萩のような若君の身の上が心配でならないのです」

と、心乱れながら書いてある。

――私はただただ若君のことが気掛かりで――。

そう書いてある手紙の向こう側に――言葉の端々に――北の方の本心が見え隠れしている――

。

――若君を守っていたのは亡き更衣――娘であって、帝――貴方ではなかったでしょう？、と――。

――私は、貴方が、若君を守ってくれる「防ぎし木」に――娘の代わりに――なるとは思えないのです、と――。

帝は、そんな北の方の本心を知ってか知らずか、

「気持ちが乱れているときだからな……」

と許している。

「心乱れながら書いてある」のだと、見逃している。

そう――彼は――帝は、「帝」らしくあろうとしているのだ――。

最近の帝は、周りの者に自分の取り乱した姿を見せまいと努め、思いを静めている。

しかし、どうしても彼は辛抱がし切れない。

かの更衣と出会った頃——彼女を見初めた頃の年月の思い出までもかき集めるようにして、懐かしさに思いを巡らし続けていた。

そして、一方では、

「あの人が生きていた頃は——片時もあの人を見ずにいられなかったのに——。

こうしてあの人を亡くし、あの愛しい姿を見ずに、よく今まで月日を過ごして来れたもんだ……」

と、不思議な思いもしてくる。

帝は、北の方の手紙を閉じると、星の瞬く空を見上げた。

「故大納言の遺言に達えることなく宮仕えの本懐を貫いてくれたお礼に、あの御老体にも『あの人が宮仕えをした甲斐があった』

とってくれるようなことをしてやりたいと考えていたんだが……。

仕方がない——」

帝はそう言い、北の方を「いとあはれ」と思った。

「こうしてあの人を亡くし、若君をあの北の方から引き離すのも気の毒に思えるが……。

いつの日か、若君が御成人になれば、北の方にも喜んでもらえる機会もあろうし。

その時まで辛抱してもらおうとしよう。

北の方には『どうか長生きをなさって、その時まで思い念じませ』と伝えておくれ」

帝の思いは——決まっているのだ。

「帝」として若君を手に入れる。何としてでも。

そう決めていた。

帝にそこまで言われては、かの北の方も承知せずにはいられないだろう。

靱負の命婦は、亡き更衣の実家で手紙とともに渡された贈り物を、帝の前に差し出した。

そしてそれを、手に取った帝は、——。

——あの人の——裳束と釵——。

帝は立ち尽くす。

——空 持 旧 物 表 深 情

鈿 合 金 釵 寄 将 去

釵 留 一 鈿 合 一 扇

釵 擘 黄 金 合 分 鈿

但 教 心 以 金 鈿 堅

天 上 人 間 会 相 人——

帝は再び、白楽天の「長恨歌」の一節を思い起こす。

「長恨歌」によれば――。

「安祿山の乱」によって都落ちをせざるを得なくなった玄宗であったが、その逃避行の途上、兵士たちの不満が爆発し、楊家一族は次々と惨殺され、遂には、兵士たちは、一人残った楊貴妃の処刑を玄宗に要求する。

玄宗は、彼女に「自刃」を賜らなければならなくなった。

そして――楊貴妃はこの世を去る。

自分の手で、愛する者に死を迫らなければならなかった玄宗は、反乱が鎮圧され、都に戻った後も、涙に暮れて日々を過ごす。

故人を哀慕し続ける玄宗は、ある道士に命じて、楊貴妃の魂の居場所を探させる。

世界の隅々を捜し回った道士は、海の彼方の仙山にあるという蓬莱宮で、生前の楊貴妃が女道士になった時の号と同じ「太真」と呼ばれる仙女となっていた楊貴妃を、遂に見つけ出す。

皇帝の使者である道士を出迎えた楊貴妃は、

「今はただ、昔の物によって、私の皇帝陛下への深い思いを表しましょう」

と言って、二つに割った釵の一方、蓋と身に分けた香箱の一方を、道士に託す。

釵は黄金を割り、香箱は青貝細工の螺鈿を分けたものであった。

「二人の思いが、この釵の黄金や香箱の螺鈿のように堅固なものであれば、天上界と人間界に別れてしまった私と貴方も、必ず再び、逢えるに違いありません――」

楊貴妃は道士にそう言づけたのだった――。

――嗚呼――！

帝は、亡き更衣の釵と裳衣を手にとったまま、空を仰ぐ――。

「これが、亡きあの人は今住む所から持ってきたという証拠の釵であったなら――」

そういう思いがするの、ただ虚しさが募るばかり――。

「――尋ねゆく幻もがなつてにても

魂のありかをそこと知るべく――

あの人を捜し出してくれる幻術士がほしい。

人づてにでも、あの人を捜し出すことができるように――」

そう歌ってみても、誰もあの人を捜し出すのを教えてはくれない。

宇多天皇が描かせたという屏風絵の中の楊貴妃の姿は――著名な絵師によってでも、筆に「限り」というものがあつたのだろうか――生気が少なく、その美しさを描き尽くしているとは、どうも感じられない。

太液池に咲く芙蓉を思わせるという顔立ち。

未央宮に栽えられた柳の典麗さにも似た眉。

楊貴妃の、本当にその通りであったに違いない容顔で、唐風の装束や装身具を着こなし、身に

つけた姿は、想像もつかぬほど端麗なものであったことだろう。

「それでも——」

帝は思う。

亡き更衣の優しく、愛らしかった姿を思い出せば——

あの人の姿や声は、花の色、小鳥の声にも例えようがないものだった。

蓮の花や柳の葉に例えられる楊貴妃の絶世の美しさより——

花や小鳥にも例えられぬあの人の可憐さが、この上なく愛おしい——。

かの更衣が生きていた頃、帝は、朝にも夕にも口癖のように、

「比翼の鳥となって羽をならべ、連理の枝となって枝を交えよう」

と、かの更衣と約束したものだ。

雌雄一目一翼で二羽一体となった「比翼の鳥」——。

二本の木の枝が合して一体となった「連理の枝」——。

玄宗と楊貴妃がそう誓い合ったという故事に倣い、帝も亡き更衣と約束を交わしたものだ
が——

その悲しい運命までも共になるとは——。

そう知っていたなら——あの人が私を残して死んでしまうと知っていたなら——

あんな契りなど——あんな不吉な運命を導く契りなど交わさなかったのに——。

私は、もう、そんなものは望まない——。

私の望むものは——違う——。

だから——あの人をかえしてほしい——！。

——約束を果たすこと無く終わってしまった、あの儂い命が、尽きること無く恨めしい——。

そして、そのような約束をしてしまった己が——。

風の音や虫の音を聞けば、帝は亡き更衣のことを思い出し、もの悲しい思いがしてならない。

秋という季節にさえ恨めしく思えてくる。

そのような帝の思いを知ってか知らずか——

弘徽殿女御は、長い間、清涼殿の帝の寝室にあたる「御殿(おとど)」北隣、弘徽殿の上の御局
に参上することもなく、月が風情あふれる夜になれば、夜が更けるまで管弦遊びに興じていた。

帝への当てつけにも聞こえるほど。

「なんて興ざめな……不愉快だね」

帝はそう思いながら聞いていた。

近頃の帝の、悲しみに沈んだ様子を知っている側近や女房なども、同様に苦々しい思いで聞い
ている。

——弘徽殿女御は、何かにつけて無理に我を張ることが多く、角のある人だった。

かの更衣の死、そして、それによる帝の悲しみも、

「知ったことではない」

と、無視した様子で振る舞っていた。

それが、この人の——かつての帝の寵愛を受け、そして失ったこの人の——為人というものだ
った。

月が入った——。

「——雲のうへも涙にくるる秋の月

いかでかすらむ浅茅生の宿——

宮中でも涙に曇って暗く思える秋の月が、

どうして草深いあの宿で、澄んで見えるというのだろうか。

我が子とともにこの美しい月を眺めたい——。

そうすれば、この月が涙に霞むこともなくなるだろうに——」

と考えながら、帝は燈火をかかげ、その油が尽きてまでも、眠れずに起きていた。

——秋 燈 挑 尽 末 能 眠——

玄宗と重なる自分を、帝はどう思っていたのだろうか——。

右近衛府の宿直者が、その上司に姓名を告げる「宿直奏」の声が聞こえ、

「もう、丑の一刻になったのか」

と分かる。

さすがに、いつまでも縁側に居ることもできず、人目を憚って、寢室である夜の御殿に入ってはみたが、微睡(まどろ)むことさえない。

そのまま朝になり、結局眠ることのなかった体を起こして、

「伊勢の、

——玉すだれ明くるも知らで寝しものを

夢にも見じと思ひかけきや——

御簾を下げたまま、夜が明けたことも知らずに寝ていたものだったのに、

こうしてあの人が死に、夢でも逢えなくなろうとは思ってもいなかった……。

という、玄宗の身になって詠んだ歌があったけれど……。

あの人と私も、夜が明けることに気付かないまま供に寝ていたものだったな……」

と思いを巡らす。

そのようなことを、ずっと思い続けているからであろう。

かの更衣を亡くした今もなお——いや、かの更衣が生きていた頃にも増して、早朝の政事を怠ってしまうようだった。

朝餉の間(あさがれひのま)での簡単な食事も、恰好だけ箸を付け、清涼殿の昼の御座での正式な食事である大庄子の御膳などは、全く目に入らない様子で、給仕を勤める者は皆、帝の心配な様子を見ては嘆いていた。

帝の側に仕える者は皆、男女を問わず、

「全く……、困ったことだ……」

と言いあっては嘆く。

前世から、そういう運命にあったというのだろうか。

かの更衣が生きていたころは、周りの者の非難——殊に女たちの恨みを憚ること無く、気付く

こと無く——かの更衣のこととなると「道理」というものを失い……。

その人が亡き今となれば今で、俗世のことを思い捨てる様子になっていくのを見ては、臣下の者たちは、

「あるまじきことだ」

と、異国のことさえも例えに持ち出してささやきあっては、忠臣面をして自分勝手に嘆きあう。

帝は——それでも——愛を捨てなかった——。

——私たちは——玄宗と楊貴妃と似た悲運を辿ったが——

私たちは玄宗と楊貴妃に似ているが——違う——。

私たちには——かの若君が——愛すべき我が子がいるではないか——。

月日は経つ――。

かの若君が、とうとう内裏に参内することとなった。

人の世のものとは思えぬ美しさ――。

かの若君の成長ぶりは――神がかりなまでの美麗さに彩られている。

「美しき子は神に愛でられ、神隠れにあうというけれど……」

帝がそのような心配をするほどであった。

年が明け――春が来る――。

かの若君は御年四歳となっていた。

帝にはそう年の違わぬ弟君がいて、かつてはこの弟君が春宮(とうぐう)として立てられたが、若いうちに病死。

今では「前坊」と呼ばれ、思い出の人となっている。

既に春宮となる資格を持つ者は、帝の息子である親王たちのみとなっていた。

帝は、皇太子である春宮を正式に決定する時期に至ってもなお、第一皇子を超えて、かの若君を皇太子に立てたいと願って止まなかった。

しかし、かの若君には後見となる親族もおらず、また世間が――右大臣一派が――承知するはずもない。

かえって若君の身が危うくなるように思われ、そんなことは素振りにも出さないように努めた。

「あれほど若君を可愛がっておられたが――

やはり春宮にするには無理があったんだな」

と無責任な世間は噂する。

弘徽殿女御が、自分の息子である第一皇子が春宮に事実上決定していたことに、安心したのはいうまでもない。

第一皇子が春宮にさえなれば、かの若君が政治上でかなうことはもう無くなった。

春宮となれば、これは帝に「次ぐ」者、帝を「継ぐ」者となる。

何ら後見を持たず、ただ帝の寵愛だけを後ろ楯とするかの若君など、問題にならない。

――いつでも――いかようにも――

かの更衣のように――。

弘徽殿女御は、輝くばかりに美しい若君を見下ろし――いや、見下し、そう思っていたのだろうか――。

若君が春宮になれなかったこともあったのだろう。

かの更衣の母である北の方は、かの更衣の死への気持ちが晴れることもなく、未だ哀しみつづけていた。

日頃から、

「娘の居るところに——いきたい」

とだけ願うようになり、ますます気弱になっていた。

そして遂には、そのままこの世を去ってしまった。

「あの人の思い出が、また一つ……」

帝の悲しみは限りがない。

——すまない、と思う。

——若君を無理に内裏に参内させたことも、その死を早めた原因であったのだろう、と思う。

——だが、悔やんではない。

——私は——帝だ。

若君は既に六歳になっており「死」の意味も理解して、祖母である北の方の死を哀しんだ。

母の「死」をわからなかったあの幼いころから見れば——かの若君の美しい限りの成長がせめてもの慰めになっていたが、この美しい若君の「これから」という成長の途中で逝ってしまわねばならなかった北の方のことを思えば、周りの者たちの悲しみはいっそう深くなった。

それからというもの、若君は内裏の中だけにいることとなった。

帝がそうさせたのである。

本来、皇子たる者、幼少のころは母方の実家において養育され、そこで基礎的な教養を学ぶ。

母方の実家でその幼児期の多くを過ごすわけであるから、母そして母方の祖父との間に、親族家族としての強い絆、情が生まれ、育つ。

これがこの時代の、摂関政治の温床ともなっていた。

だが、かの若君には帰るべき母方の実家、つまり後見となる者がいない。

かの若君は、自分の膝下でこの上ない愛情と教養を以て育てる——それが帝の決意だった。

かの若君は七歳となった。

皇子が初めて書物を読む「読書始めの儀」なども、帝御自らが執りしきる。

かの若君の才覚このうえなく、様々な書物なども瞬く間にすらすらと読めるようになった。

「この世のものとは思えぬ」

と学者も驚愕するほどの伶俐さで、

「なんと——末恐ろしいまでだな」

と、帝は言葉とは裏腹に満面に喜びを表し、その嬉しさを隠すことができない。

美しさと聡明さ——二つの類稀なさを持った若君を、一層愛おしんだ。

また、

「今となっては、誰もこの若君を憎むこともないだろう？」

母君をなくしてしまった可哀相な身の上なのだから、可愛がってやっておくれ」

と言って、弘徽殿女御の局に渡るときでさえ、若君を供に連れていった。

そしてそのまま御簾の内にまで連れ入れる。

屈強な武士や仇敵であろうとも、若君を見て微笑まずにはいられないであろうほどの美しさであったのだから、さすがの弘徽殿女御も若君を邪険に突き放すことができない。

自分のもとに若君が歩み寄れば、無意識に扇を外し、その幼髪を撫でてしまう。

「なんと——愛らしい」

そんな言葉さえも自分の口から漏れそうになるのを、弘徽殿女御は必死に堪えていた。

畏ろしさとも言おうか——

神々しいまでのその美しさは、末恐ろしさを飛び越えて——

畏ろしい——。

弘徽殿女御には春宮の妹にあたる皇女が二人いたが、若君の美しさとは比べものにならない。女でさえも敵わぬ美貌——それがかの若君の美しさ——。

他の女たちも、幼い若君と会うときには御簾や扇で顔を隠すことがない。

若君の艶やかな美しさ、圧倒的な気品に、女たちも何となくこちらが気詰まりな気がしてしまうのだった。

師について学ぶ漢学は元より、琴笛などの管弦の音は大空に響き、「雲居」たる宮中に轟き、人々を驚かす。

そのような逸話が多く語られ、一つ一つを聞いていると、

「冗談だろ？」

と、聞いているほうがその天才ぶりにうんざりするほどであったという。

そのころ、来朝した高麗人のなかに優れた人相見ができる者がいるらしいと、帝は臣下の者から耳にしていた。

その人相見を呼んで、若君のことを占わせてみせようと思ったが、かつて宇多天皇が定めた「寛平の御遺誡」の中で

「やむを得ぬ場合以外、宮中には部外者を入れぬこと」

とあったのを思い出し、これに背くわけにもいかず、こちらから赴かねばならなくなった。

尋常でないほどに気を使った御忍びで、若君を七条朱雀の外国使臣の宿舎となっている「鴻臚館」に連れていった。

若君を普段世話をする右大弁の子息ということにして連れていったところ、その人相占い師は若君の姿を見ただけで驚き、何度も首を傾げ怪しむ。

「失礼な言い方ではありますが……」

この御子様は——本当に臣下の子なのですか？」

そう前置きしてから、人相見は続けた。

「国の長となり、帝という『上無き位』に昇らんというほどの高貴な相をお持ちの方ですが——

。

しかし実際にそうになってしまうと、国は乱れ、民が憂うこととなりましょう。

その代わりと申しましょうか、朝廷の柱となる臣下となって、後の世の帝が天下を治める輔けとおなりになれば、その栄達は間違いございませんまい」

そう言って、人相見は意味ありげに、しみじみと若君を眺める。

右大弁も才覚があり、漢学においては博士とも成らんほどの人物であったので、その後に人相見と話し合ったことも大変興味深く、奥が深いものとなった。

右大弁が、人相見と漢詩などを互いに作り交わし、帰ろうとしたときのことだった。

人相見が若君を見て、

「このような世にも類稀に高貴な方にお会いできるとは……」

と言って喜び、別れ際の悲しみの思いを趣深く漢詩にのせて作ってみると、何ということか、若君がそれに応えて心打つ詩句を作り上げたのである。

「六歳の子供が——

なんと素晴らしい——

やはりこの御子息は——」

人相見は限りないほどに若君を褒め上げ、珍しい贈物を若君に献上した。

帝も親ながらにその話を聞いて嬉しく思ったのであろう。「朝廷から」ということにして、人相見に多くの金品を送ったのだった。

わざわざ「右大弁の子」として遣わせたことが、水の泡になるほどであった。

帝がそんなふうであるから、結局そのことは自然と知れ広まってしまった。

帝自身も他人に漏らした覚えはなかったが、弘徽殿女御の父で春宮の外祖父である右大臣な

ども、

「どういふことだ？」

と事の真相を掴みきれずに探りを入れるほどであった。

帝は、以前にも自国の人相見を呼び寄せていて、すでに前々から若君の将来についてある程度の予想は立っていた。

それで今まで、かの若君をただの「皇子」としていたのである。

「皇子」は「親王宣下」があつて初めて「親王」となる。

そしてそれは、「次代の春宮候補となる」ということに他ならない。

だが若君は未だその親王宣下を受けず、あくまでも「皇子」のままであった。

そういった状況のなかでの高麗人の人相見の結果であつたのだ。

「さすが、かの人相見はよく見抜いている」

と帝はしきりに感心していた。

「この愛らしい我が子を無品の親王にはすまい」

帝は決心した。

親王には一から四までの「品」があり、その「品」の上下によって給与や待遇に差別が生じる。

その「品」さえもない者が「無品の親王」なのであるが、その「品」は当世の帝との等親、そしてなによりも母や母方の一族の権威によるところが大きい。

母方の有力な親族もない、かの若君が親王となったところで、無品の親王となるに違いない。「この愛らしい若君を無品の親王などにして、外戚の後ろ盾もない不安定な生涯を送らせる様なことは決してさせまい。

今はいい。

私が全身全霊を以てこの子を守ろう。

あの人の面影を持ったこの子を——愛すべき我が子を守っていこう。

だが、私の『御世』がいつまでも続くわけでもない……。

この子は人相見どおり、臣下として後の帝の輔けとなるほうが、私のいない将来も頼もしい——」

それが帝の考えであった。

そういう思いであったから、ますます帝の若君への寵愛は増すばかり。

諸道——政治、律令、史学、詩学、歌学など、できうる限りの学問を——若君が後々に政治家として「男」として必要な学問を、この上ない師につかせて教えさせた。

若君も、類稀な才覚でそれらの教養をどんどん吸収し、自分のものとしていく。

まさに「帝王学」というものを、余りにも幼い若君は学んでいったのである。

帝は、若君の飛び抜けた神がかりなまでの聡明さを見ていると、この子を臣下として下らせることがやはり惜しく思えたが、若君が親王となれば先は見えている。

無品とは言え、親王となれば、それ即ち春宮候補に他ならない。

世間から、

「春宮に御立てするつもりではないのだろうか」

などと疑念を持たれるに違いない。

そうなれば右大臣一派の若君への警戒心を煽ることとなる。

今はただ「帝の子」として、あの弘徽殿女御も若君に愛らしさを感じているようだが、己の息子の政敵となれば話は別である。

ましてや若君は「今は亡きかの更衣の形見」なのだ。

あらゆる手で若君の失脚を模索しよう。

何の後ろ楯も持たぬ若君では、後々の没落の日々は目に見えている。

現に帝は、そういう、なまじ親王であったがために不幸のなかにあつた者たちを多く知っている。

臣下となればその心配はない。

かの若君の才覚があれば、いかなる立身もできぬことはない。

「臣下」はどうあっても「帝」を超えることはできぬ。

右大臣家も若君のことを表立って目の仇にすることはあるまい。

「後は、あの子の才覚に——運命に任せるしかあるまい……」

帝の思いだった。

そして、念のためということもあったのだろう。

二八の星座つまり二八宿と九曜星の運行によって運勢を占う宿曜術の道士に、若君の将来を占わせると、やはり高麗の人相見と同じ結果となった。

帝は遂に決意した。

若君に「源」の姓を与え、臣下に下すことを決定したのである。

天下の至上にあるはずの皇族が、臣下に下るときに与えられる姓——

「源氏」——

「帝と『源』(みなもと)を同じにする」

という意味を持ったこの姓は——なんと光々しく、なんと高貴で、なんと悲しげな姓であることか——。

だがそれさえも——光々しさも悲しさも——

若君の美しさには敵わず——

全てのものが打ち消されてしまった——。

《コラム2参照》

また、日々は過ぎる。

帝は、かの更衣のことを忘れることがなかった。

慰めになるかと、しかるべき妃たちを召してみるようにはなったが、心が満たされるはずもない。

——私は快樂で——躰で——あの人を——女を——愛したのではない——。

「あの人に並ぶような女なんか、そういないもんだよ」

と自分で自分に言い聞かせている。

そんなときのことだった。

「先帝の第四皇女が容貌美しく成長されている」

という評判が広がり、帝の耳にも届いた。

先帝とは言っても帝の伯父にあたる人である。

生前に譲位して上皇になることが多い中で、在位のまま崩御したことで「先帝」と呼ばれているだけで、帝には、一代前の、今は一の院となっている父もいる。

つまり先帝の第四皇女ということは、家系的に言えば帝の従姉妹にあたる人であった。

その姫君のことを、彼女の母后が例のないほど大切に世話をしている、というのである。

帝付きの女房の一人である典侍は、先帝の御世にも仕えていた者であったので、今でもその母后の屋敷に親しく出入りしていた。

その四の宮と呼ばれる人を幼いころから見ており、成長した今でも御簾の隅や扇の端から度々その美しい容貌を見て、

「亡くなったかの更衣様の御容貌に似てる人なんか、私は三代続けて帝にお仕えしてきましたけど、見たことなんて無かったのに。

今度ばかりは、ほんと——あんなに似ている人なんかいないんじゃないかって思えるほどですよ。

今まであの御屋敷に遊びにいったいながら何を見ていたんだらうって。

ほんと『世にも稀』というような御器量の方で——」

と、帝への報告にも一人舞い上がっていた。

帝は、

「本当だろうか——？」

と心が止まり、礼を尽くしてその姫君の参内を申し入れた。

——あの人に似ているというその姫を、この目で確かめたい——。

帝の思いは滾(たぎ)る。

だが四の宮の母后は娘の入内を承知しなかった。

「なんと恐ろしい——。

春宮の母君であるあの弘徽殿女御の意地の悪さは評判のこと。

かの桐壺の更衣という方も目に見えて蔑ろにされ、そのせいで早くに亡くなったというではな

いの。

そんな桐壺の更衣に似ているという噂が立っているのも縁起でもないというのに……」

四の宮の母后は必要以上に用心していた。

母后として自分の可愛い娘を、このまま不遇のうちに人生を終わらせるようなことはさせたくない。

帝の妃となり、そして后となればどんなに素晴らしいことだろう。

だが、時期が悪い。

帝を信用せぬわけではないが……安心できない。

先帝の第四皇女であり後ろ楯もしっかりとしていて、かの更衣のようなことはあるまいが、問題は帝ではなく、あの右大臣家である。

用心に越したことはない。

いざとなれば名家の子息との婚姻という手はいくらでもある。

焦ることはないのだ。

そう思いながら、はっきりとした決心もつかぬまま時は過ぎて、その姫の母后が急死してしまった。

《コラム3》参照》

今まで自分の世話一切を取り仕切ってくれた母を亡くして、四の宮は心細く、「どうしたらよいのか」

と困惑していた。

そこに帝からの書状が届く。

「ただただ私の皇女たちと同列として御迎えしますから」

という参内の誘いである。

「皇女たちと同列として」

つまり

「宮仕えに必要な後ろ楯など心配せずに、ただ御身一つで参内なさい。

全て帝たる私が皇女と同じように御世話いたしましょう」

そう言うのである。

四の宮にはしっかりとした後見がいる。

先帝の後となった母後の実家の人々がそれであった。

先帝の後にまでなった人の実家の者たちであるから、左大臣、右大臣には及ばぬものの、今でもなお、かなりの実権を握っている。

それでもなお、

「その後見が例えなくとも、私があります」

と言ってくれた帝の言葉は最上の魅力を感じさせた。

四の宮の周りの女房を始め、後見である母方の実家の者たち、四の宮の兄であり元親王で今は兵部省の長官を務める兵部卿の宮なども、

「四の宮が心細く一人で暮らしているよりは、宮中に参られ、お遊びになられたほうが、御心もまぎれるでしょう」

と、四の宮の参内に賛成した。

かつて母后が心配していたことなど誰も覚えていない。

四の宮の幸せだけを願い、権威欲は一切ない——と言えは嘘になろう。

四の宮が宮仕えを始めれば「それなり」の見返りが期待できる。

特に今回は帝御自らの御召しである。

「后として」というふうに公言されてはいないが、今は亡きかの更衣に似ているということで四の宮を召しているというのだから、後々には——そう期待していた。

華やかな憧れの宮仕えから遠ざかっていた女房たち——。

権力の中樞、前線から遠ざかっていた後見の実家の者たち——。

先帝の親王ということで正四位下であるが、軍事的意義を失い閑職となっていた兵部卿に甘んじている兄宮——

彼らの「思い」が——

「思惑」が——

「欲」が――

遂に四の宮を参内させることとなった。

四の宮は参内してから、彼女が入った局の名から「藤壺の宮」と呼ばれるようになった。

飛香舎の和風名である「藤壺」は、中庭に藤を植えてあることからこう呼ばれ、清涼殿の北、弘徽殿の西に位置し、勢力のある妃に賜る局であった。

帝がどれほどの気配りをしているのか、何人にも分かるというものだった。

藤壺の姿、雰囲気は、不可思議なほどにかの亡き更衣を思わせた。

あの高貴さ——

あの可憐さ——

あの美しさ——。

何もかもが同じように見えてしまう。

美しさだけを見れば、かの更衣以上という者もいた。

ただ違うことは、藤壺はかの更衣に比べるとその身分も高く、人々も最初からそういう目で見
ていたから、どこにも申し分がなく、悪しざまに言うものなど誰もいない。

あの弘徽殿女御でさえ、先帝の皇女である藤壺については表立って何も言わなかった。

何人にも憚る必要も無く、何一つ不足したところもない。

亡き更衣は、周囲の者が承知せぬままに、それに反して帝の愛情が深すぎたのである。

藤壺のその完璧さが、彼女の容貌の美しさを一層際立たせるようにも思えた。

初めのうちは、

「なんと、かの更衣に似ていることか……」

とばかり言っていた者たちも、

「なんと輝くまでの美しさであることか」

と、その美しさ、可憐さに目を奪われるようになっていた。

「かの更衣に似て、非なるもの」

かの更衣と藤壺とどちらが美しいのか、それを言い切れる者はいなかった。

帝は、あの悲しみが紛れるというのではなかったが、次第に藤壺に心が移っていくよ
うになった。

「なんとあの人に似て——また、美しい——」

格別に思いが慰められていくように思えるのにつけても、感動さえ覚えてくる。

すでに形式としては臣下に下り、今では「源氏の君」と呼ばれるようになった若君は、今でも
帝の側を離れることがなかった。

であるから、帝の下に度々渡ることになった藤壺も、源氏の君に扇や御簾でいちいち姿を隠し
てばかりもいられない。

自然、源氏の君は藤壺の美しい容貌を目にするようになった。

宮中に仕える女御や更衣たちの中で、

「自分は他人に劣っている」

と知っている女は、まずいない。

程度の差こそあれ自分の美しさに自信を持ち、事実、それぞれの女はそれぞれに美しい。

だが、今上の帝に仕えている女たちは、皆少しずつ年を重ねた「大人」である。

少なくとも源氏の母、もしくはそれ以上の年代の「女」たちである。

その中であって藤壺は際立って若く、可愛らしげで、あからさまに姿を見せるのではないが、

源氏の君は彼女の姿を自然と身仰ぐことになった。

源氏の君に、母である今は亡き更衣の顔だちの記憶があるはずもない。

母が死んだのは、三歳の夏。

あれから数えれば、あまりにも時は過ぎてしまった。

しかし、源氏の周りの者たちには、あの頃から仕えていた者も多くいた。

典侍もその一人である。

「藤壺宮様は、亡き母君に本当によく似ておいですよ……」

と典侍が言うのを聞くにつけ、源氏の君はその未だ幼い心ながらに、

「これが……懐かしさというもの？」

と思いを巡らし、そう思えば、いつも——もっと藤壺の側にいたいと思え、また、もっと親しく近づき、その母に似ているという美しい姿を見ていたいと思う。

帝は、そんな源氏の君と藤壺の二人共を、またとないほど愛おしく思える。

かつての思いが蘇る——。

あの頃の思いが——。

「あの子が、貴女のことを殊の外、御慕いしているようですね。

疎遠にはなさらないでやってください。

私も貴女のことを、どうしてもあの子の今は亡き母親であった人に似ていると思えてならない……。

周りの者たちも源氏にそう話しているので、あの子も貴女のことを御慕いするんでしょう。

それで、貴女の姿を見たいと思っているのでしょうかね。

ですから、無礼だとは思わず、可愛がってやって下さい。

顔だちや目元なんかが、本当によく似ておられるのですよ——あの人に——

二人で並んでいると、貴女があの子の母に見えてしまうのも不似合いではないのだから。

私も、貴女とあの子が仲睦まじくしてくれれば、嬉しいですからね」

と、帝は藤壺に話していた。

源氏は、その幼心に藤壺を慕う自分の思いを知っていた。

たわいない春の花、秋の紅葉に、似合った歌などを付けて、

「これを……」

と顔を紅潮させながら手渡し、自分の心のほどを懸命に伝えようとする。

周りの者たちは、

「あら、おませなことで——なんと可愛らしい」

と笑っていたが——

源氏の君の思いは一途で——真摯で——。

「……ありがとうございます」

その源氏の思いを藤壺は知っていたのだろうか——その歌や花を見ても、心の底から嬉しそうに微笑み、喜んでくれる。

それが、源氏には、このうえなく嬉しかった。

源氏や帝が、宮中においては新参者でしかない藤壺に格別な好意を寄せていることは、弘徽殿女御の耳にも入っていた。

右大臣家の令嬢である弘徽殿女御が、その地位を脅かす可能性のある皇族の血をひいた藤壺と、仲が良いはずもない。

それに加えて、今は亡きかの更衣への憎らしさも甦ってくる思いもして、藤壺や、その藤壺に好意を寄せているという源氏の君の仲を、不快に感じていた。

だが今回は「かの更衣の時のように」はいかない。

藤壺は元皇族である上に、母后方の後見もしっかりしている。

自然、弘徽殿女御の恨みつらみは、源氏一人に集まるようになっていった。

後宮を持ち、様々な美しいはずの女たちを見てきた帝が、
「世にも類稀」

とまでいった美しさが世間でも名高くなっていた藤壺の容貌であったが、その藤壺の側において比べてもなお、源氏の君の活に満ち、照り映える美しさは、人世の言葉では例えようのないほど。

次第に人々のあいだでは、源氏の君のことを「光君」と呼ぶようになっていた。

藤壺は美しい。

かの亡き更衣に似ているからというのではない。

彼女の美しさ、高貴が、美しいままこの世を去った人の思い出さえも凌ぐほどの美しさを放って止まない。

しかし、それは女の美しさ——人の世の美しさである。

源氏の君は——光君は——違う。

人身を越えた目も眩むほどの——

神がかりの——

神々しいまでの——

光々しいまでの——

畏しいまでの——美しさ。

この美しさは——世人の持ち得るものとは思えない——。

神でさえも魅入らんとする、輝かんばかりの美——。

源氏の君の美しさは、何人も及ぶものはない。

源氏の君と藤壺とは、二人並んで帝の寵愛もそれぞれに厚く——。

「光君」

「輝く陽の宮」

と呼ばれた。

そんな源氏の君の童姿を、帝は変えることが辛く思える。

——このまま——

あの時のまま——。

しかし、十二歳になったことで源氏の君は元服することとなった。

「御袴着の儀」同様、帝自身が何から何まで取り仕切る。

「親王」「皇子」の元服ではない。

あくまで「源」の姓を持つ臣下の元服であり、それに則ったしきたりによって準備が進められた。

「先年、紫宸殿にて行われた春宮の元服の儀はさすがに盛大であった」

という世評にも、

「劣らぬように」

と、各役所で廷臣、女房たちに賜る馳走などを、内蔵寮や穀倉院に公式の定めどおり調進する

。

さらには、

「それでは足りぬこともあろう」

ということで、特に勅命があって通常よりも善美を尽くして調進され、この上なく豪勢なものとなった。

宮中における元服の儀は唐風の作法によって行われる。

したがって、普段は使うことのない「椅子」と呼ばれる掛け物が用いられた。

帝の住まいである清涼殿の東廂で、東向きに帝が座る椅子を立て、その前に冠者である源氏の椅子、加冠役である左大臣の御座が置かれた。

全ての準備を終え——申の刻、源氏の君が参上する。

帝や左大臣、他に侍う者たちの間から、嘆息が漏れ、また或る者は息を呑んだ。

「なんと——」

あまりに美しい姿の源氏の君を形容する言葉を思いつくことができない。

詩にすることも——歌にのせることも——この美しさの前には憚れる。

長い髪を左右に分け耳のあたりで束ねる「みづら結い」をした源氏の君の姿を、この元服の儀を最後に見れなくなってしまうことが、帝にはとても惜しく感じられた。

その顔の色つや、容貌の感じも変わってしまいそうで——。

大蔵卿が源氏の君の理髪役を務めた。

至上に清らかな髪を切り揃えていく姿が、帝にはいたわしく思えてしまう。

ただ、こんな風景であっても、かの更衣がここにおいて見てくれたなら——そう思い、涙が零れそうになるのを心強く念じて堪えていた。

「今は、あの子の晴れがましい時ではないか——涙は——まだ早い——」

左大臣が源氏の君に冠を被せ、紐を結び、加冠の儀は滞りなく終わった。

休息所で一時休み——とはいっても本当に休むことはできない。

その間に、子供が着る脇の開いた「鬨腋の袍」から、成人用の「縫腋の袍」への着替えを済ませ、外観はすっかり成人のものとなった。

しばらくして、源氏の君が表に再び現れ、東庭に降り立った。

「おお……！」

式に参列する者たちの響動めきは、しばらく治まることを知らなかった。

源氏はしきたりにしたがって、謝意を表す拝舞をする。

再拝し、笏を置き、立って袖を左右左と振り、座って同様に行い、笏を取って小拝、立って再拝することで、手踊り足踏むことを知らず、という喜の様子を表すのである。

その舞を見るだけでも、皆の目から涙が零れ落ちそうになっていた。

「この世で、このような素晴らしいものを目にすることができるとは——」

そう、口々にこぼし、溜め息をついている者さえいた。

帝は帝で、まして耐えることができるはずもなく、思いが紛れることもあった昔のことを——あの日のことを——あの人のことを思い出し——改めて悲しみを思い起こす。

だが——それにしても——

帝は思わずにはいられない。

実の齡よりも幼くさえ見える源氏の君が、元服をし、髪を結い上げてしまうことで、その美しく愛らしい幼髪結いから比べると見劣りしてしまうのではないかと心配していたが——。

見劣りするどころか、一段とその美を増し、言葉もないほど愛らしさが増している。

そんな源氏の君の姿を見て、

「やはり——この方しかいない」

そう一人呟いたのは、臣下として国政の頂点に立ち、今回の元服の儀において加冠役を務めた左大臣であった。

左大臣は今上帝の実姉にあたる人を妻としている。

律令においては、皇親子女の婚姻は皇親同士と定められており、本来、皇女と臣下諸氏との婚姻は認められていない。

しかし配偶者選びや皇親子女の生活保障の困難さから、臣下の中でも最上位層しかも大臣階級に限って、皇女の降嫁が認められる。

歴史上、十数人しか例を見ない、この皇女の降嫁という最高の名誉をこの左大臣は受け、それを基盤として皇族との関係を広げ、その地位を堅固なものにしていったのだった。

その左大臣と皇女であった大宮との間に生まれた子の中で、ただ一人、姫がいた。

その姫に対しては、現春宮つまり弘徽殿女御しいては右大臣家からの所望もあったが、左大臣はそれを断っている。

姫が后となる機会を棒に振った理由として、右大臣家に対する対抗心がなかったわけではないが、第一の理由は、源氏の君が元服を終えた後、その妻として娘を差し出すつもりであったからだった。

左大臣は、かつて帝にも直接、そういう自分の内意を申上し、伺いを立てている。

「そういうことなら——あの光君も一人前となってくれることだし、この折にも、妻として世話をするような特別な人もいないようだし。

ならば、お主の姫君を副臥に」

と帝も促し、左大臣も承知した。

「副臥」とは、春宮や皇子などが元服の夜、その「添い寝」をする公卿の娘などから選ばれる女性のことで、つまり妻となる女性のことを言う。

臣下に下った源氏の君にはすでに「副臥」という名称はそぐわないが、これが婚礼の事実上の決定であった。

両人の親同士が定めた——ごくありふれた婚姻の定め、源氏の君は何も語ろうとしなかった。

ただ、

「藤壺宮は、どうなさっておられるのだろう」

と漏らしたただけだった——。

何の後見もなく、臣下として下り、元服を終えた源氏の君は、これからは「帝の子」としての庇護も薄れる。

左大臣家の婿となれば、経済的な面はまず安泰である。

政治的なものは、源氏の君自身よりも、どちらかといえば左大臣側の方に利がある。

源氏の君のその才覚があれば、人並み以上の立身は約束されたも同然。

左大臣家の婿になること自身はそれほどの意味を持たない。

左大臣側に、源氏の君という輝ける将来を約束された「帝の子」を婿にすることに利があるだけである。

貴族の嫡子は、その父の位に比例して、二十一歳となれば自然と高い地位を与えられることが約束されている。

いわゆる「蔭位の制」と呼ばれるものだ。

例えば一位の貴族を父に持つ嫡子は、従五位下が与えられ、位田、位封、季禄をはじめとする諸給与が約束される。

臣下に下ったとはいえ、帝の寵愛を一身に受けた皇子だった源氏の君が、それ以下であるはずがない。

人並以上の——この上ないほどの栄達を約束された元皇子——光君。

その源氏の君との婚姻を定められた左大臣家の姫の心情を知る者は——誰一人としていない。

桐壺(27)

元服の儀が終わった後、源氏の君は一時、休憩所となった下侍に退出した。

だが、そう休んでいるわけにもいかない。

源氏の君の元服を祝うために、皇族一同、朝廷の要人が、今頃集っているはずだ。

主役たる源氏の君が行かないわけにもいかない。

「あの人が来てくれたなら——」

そう思わずにはいられないが、男ばかりが集う酒の席に、あの藤壺宮が来てくれるはずもない

。

「私が元服したことを、あの人は喜んでくれるかな——」

いまだじっくりこない髪と袍を鏡に映しながら、独り呟いていた……。

源氏の元服祝賀のために集った者たちが、大御酒を酒を注ぎ始めた時、源氏の君が来着した。

親王がずらりと並んだ末席に座る。

いまや臣下でしかない源氏にとっては、身に余る待遇であったが、源氏を親王の末席に座らせた張本人である帝には、別の考えもあった。

宮廷での席次は帝、親王、公卿の順である。

親王の末席に座すことになった源氏は、自然、公卿の最上位席につく左大臣と隣り合わせとなった。

宴が始まり、一同にも酒が入ってきたころ、左大臣は隣の源氏に、自分の娘との婚礼のことを言葉端にそれとなく匂わせる。

「副臥」ともなれば、今夜にもその姫君との婚礼の一夜をつとめることになる。

急な話でもあり、そのようなことにも、物恥ずかしい年頃であった源氏は、なんと答えたものやら分からない。

源氏が言葉に窮しているところに、左大臣に帝からの宣旨を内侍が伝えた。

「左大臣閣下、陛下が御前に参られるように、とのことです」

「あい分かった」

立ち去りかけた左大臣は、源氏のほうを向いて、

「では、後ほど」

と意味ありげに囁いて去っていく。

源氏は言葉を失ってしまった。

帝の側に参った左大臣に、今回の元服の儀にそっての帝からの褒美の品々が、命婦の取次ぎを介して与えられる。

白い大袷などの装束一式など、きまりにそった物である。

帝は、左大臣に盃を薦める折に、

「——いときなきはつもとゆひに長き世を

契る心は結びこめつや——

幼い光君が初めて結ぶ元結に、

貴殿の姫との末永い仲を契る思いを結びこめたのか——？」

という歌を送り、左大臣の気持ちに——姫と源氏との婚姻の儀に念を押した。

「——結びつる心も深きもとゆひに

濃きむらさきの色しあせずは——

心深く結いました元結の濃紫が褪せないのでしたら——

源氏の君のお心が、お変わりにならないのでしたら、いついつまでも——」

左大臣はそう返歌すると、長橋から降りて拝舞した。

「舅」と呼ばれることになる者には、常に不安がつきまとう。

婿が娘から離れぬよう、最善の努力を惜しんではならない。

過去、幾多もの「舅」が娘婿に去られ、それをきっかけに没落していった。

「自分はそうなるまい」と願いつつ——それが「通い婚」というものだった。

それが「色しあせずは」という言葉になる——。

宮中の馬を司る左馬寮からの馬、蔵人所の鷹なども頂戴された。

宴も酣となり、清涼殿正面の東庭に降りる「御階」の下に、親王、上達部などがずらりと立ち並び、褒美の品をそれぞれの身分に合わせて賜る。

その日の、源氏から帝へ献上する御馳走で檜の曲者に肴等を入れた「折櫃物」、籠のなかに柑、橘、栗、柿、梨の五菓を入れ木の枝に付けた「籠物」などは、後見のいない源氏のことを考えた帝が、右大弁に申しつけ整えさせたものであった。

強飯を卵形に固めた屯食、禄の唐櫃などは東庭に置ききれないほどで、賜る臣下の者たちも、思わず喉を唸らせた。

「春宮の御元服の折よりも、数で勝っているんじゃないか？」

と、口々に感心する。

こういうものは公的なきまりもなく、上限があるわけではない。

まして「誰々よりも豪華になってはいけない」というしきたりがあるわけではない。

そして、この祝賀を取り仕切るのは帝自身。

史上稀に見るほどの盛大さであった。

帝として——

父として——

それが彼の思いであった。

——その夜——。

左大臣の邸に、源氏が訪れた。

もちろん「副臥」となる左大臣家の姫との婚姻のためである。

たしか世間では、その姫君のことを——「葵の上」と呼んでいたかな——。

源氏は、気が重かった。

親が決めたこの婚姻に、不満がないではない。

その上、相手の葵の上という人を知らぬ。

どの様な歌を詠むのか——

どの様な歌が好きなのか——

どの様な声なのか——

どの様な琴の音を聞かせてくれるのか——。

そして——どのような人なのか——

藤壺宮のような人であればいいのだけれど——。

そう思って、また虚しくなる。

——いるはずがないではないか——

あの人に似る人など——

あの人のように美しく、心やすらぐ人など——

——いない——。

そう思い——思いに暮れる内、左大臣邸の南面に車が着いた。

いまだじっくりこない成人の袍と髪の乱れを少し気にしながら、車から降りる。

——これが、私の「契り」だ——。

それは、少年らしからぬ、納得のいかぬ決意だった——。

十人あまりの行列を連ねて訪れた源氏を、左大臣は丁重に迎えた。

今日今夜から、源氏はこの家の「婿」となり、左大臣を「舅」と呼ぶことになった。

源氏が家に入るために脱いだ沓を沓取役が取り、この沓を「舅」は懐に入れて寝る。

婿になった源氏をこの家に留め置くための古い呪いで、特別奇異なものではないが、このような呪いが、いかほどの力があるのか、源氏には理解できなかった。

脂燭係が両家の火を合わせ、二人の婚姻を象徴する。

婿となった源氏と、妻となった左大臣の娘——葵の上は、その夜を共に過ごす。

十二歳となったばかり、元服したばかりの源氏は、いかにも子供っぽさが残っていたが、その愛らしさ、美しさを、左大臣はたいそう可愛がる様子だった。

「お前は、かの光君よりも年上なのだから」

左大臣は、葵の上にそう言っていたのかもしれない。

「男と女のこと」など露とも知らぬ様子の源氏に比べれば、葵の上は、明らかにその夜、「年上の女」であった。

次の朝は、一時源氏は家に戻ったが、三日続けて左大臣家に通わねばならない。

それを以て始めて婚礼の儀が整うのである。

三日目の夜には披露の宴も開かれる。

その場での「露頭」という儀式を終えることで、男が妻の家に同族化するのである。

「左大臣家の姫君と、かの光君との婚礼」

という前触れもあって、披露の宴は豪勢でかつ盛大なものとなった。

本両人を置き去りにしているような勢いだ。

左大臣も、なぜか沈みがちな表情をしている二人を喜ばせようと、次から次へと催し物を出してくる。

そんな催しも、二人の目には入っていないようであった。

《コラム4参照》

葵の上は——自分が源氏の君よりも年上であることを気に掛けていた。

年上の女が、妻となること自体はそれほど珍しいことではない。

だが、相手はかの光君である。その愛らしい姿を見れば、

「不似合いなんじゃ……」

と気が引ける思いがしている。

元服を終えたばかりの源氏の君は、少年っぽさがまだ残り、その余りにも美しい容貌も眩いばかり。

女である自分でさえ、その美の前には——。

かといって、いま更に年上の女ぶるのも厭らしく思える。

かの光の君は夜の闇のなかにあっても光輝き、自分の恥ずかしい肢体が——

快感を求め悶える淫らな姿が——照らしだされているのではないかと思えてくる。

そんな姿を、あの光君に見つめられていると思うだけで露にしてしまった私は、なんといやらしい女なのだろう——。

今は臣下に下ったとはいえ、帝の寵愛未だ厚い元皇子——

左大臣の娘である葵の上との婚礼は、世間からみれば「この上ないほどの似合いのもの」であるのかもしれないけれど——。

そのような考えを巡らす葵の上は——

やはり、「年上の女」だった——。

源氏は源氏で、また彼も悩んでいた。

——たしかに葵の上は美しい——左大臣の娘であり、才覚豊かな「女」だ。

年下の自分に対して、あまりいい思いをしていないようだけれど、源氏もどうしようもない。

源氏と過ごした昨日の夜も、一度たりと源氏に「笑顔」は見せてくれることがなかった。

女の夜の表情とはそういうものなのかとも思えるが——。

この人を愛せるだろうか？——

それは疑問ではなく、あまりにも答えが見えすぎた、彼の嘆きでしかなかった。

この人に会う前、

「藤壺宮の様な人であれば——」

と、一度でも願った自分が恥ずかしい。

——いるはずがないではないか——

あの人に似た人が——あの人に勝る人など——

この世にいるはずがないではないか——。

本兩人の思いを別にして、披露の宴は進んでいった。

杯を手に、

「嘉辰令月歆無極
万歳千秋楽未央」

などと、次々と吟じられる。

中には、

「我が家は 帷張も垂れたるを 大君来ませ 婿にせむ 御肴に 何好けむ あはび さざえか
石陰子好けむ」

と歌う者もいる。

貝の名を並べ、他の参列者に淫らな想像をするよう期待して歌っているのが見え見えで、いかにも下世話で、源氏には笑えなかった。

ふと横を見れば、葵の上と目が合うけれど、彼女はすぐに目を逸らし俯いてしまう。

葵の上は、

「いつも横からお姿を盗み見るいやらしい女と思われはしなかったろうか」

と、顔を紅潮させた。

源氏は、

「もしも、隣にいるのが——」

そう思いかけて——

やめた——。

左大臣は、帝の信頼が厚い。

信頼が厚いからこそ、臣下としての最上位を手に入れているのだ。

左大臣の正妻つまり葵の上の母親という人は、帝と同腹の姉である。

臣下最上の左大臣と今上帝の姉君である大宮——どちらから見ても華やかなこの一族に、今をときめく光君が婿となったとなれば、その華々しさも一層際立つというもの。

現春宮の祖父であり、弘徽殿女御の父である右大臣が、春宮が、近い将来帝に即位してしまえば「我が世の春」というものを謳歌できることは誰の目にも明らかだった。

だが、後々の世の実権を掌握することが決まったも同然のこの右大臣家の勢いでさえ、押され気味であった。

ここ最近、一時は格上たる左大臣をも凌がんばかりの右大臣であったが、元々帝の信頼が厚いわけでもなく、今では影が薄くなった。

左大臣には、多くの女性から生まれた子供がいたが、葵の上と同じく、正妻である大宮が生んだ人で、葵の上の実兄が一人いた。

葵の上の兄にあたる人であるから、もちろん源氏よりも年上であるが、それでも未だ若い。

そしてその若さにして、蔵人と近衛の少将を兼任するほどの人物であった。

一位を持った左大臣の嫡子であるから、従五位下を約束され、それに見合った役職を得ているわけだが、この役をやりこなしているところが、ただの七光でしかない凡な公達とは違っている。

近衛府といえば、既にこの太平の世にあっては対外軍事的な活動をすることはなくなったが、様々な折には近衛兵は儀仗兵としての務めがあるため、舞や雅楽に長けた者、容姿の端麗な者が選ばれることが多い。

蔵人は帝の側近のような仕事を務め、その長となれば閣議にも出席を許され、その他多くの事務処理にもあたるから、行政上の経験が豊富となる。

したがって後々には、大臣、納言といった国家の中枢たる役職に就く者が多い。

この二つを兼任するということは、この人が、上層部にもかなり有望視されている証拠である。

その若く、美男で、有能な彼を、左大臣とは仲の良くないはずの右大臣が目をつけ、箱入り娘のように育てた四の君の婿として迎えた。

この有望な若者がもし、大臣などにでもなれば、左大臣家の勢いはいやが上にも盛り返してしまう。

それに対抗できる有能な男子など、右大臣にはいなかった。

四の君の婿となってしまうえば、この若者の働きは「左大臣の嫡子の働き」であるのと同時に「右大臣の婿の働き」となるのだ。

左大臣が婿の源氏を大切にもてなすのに負けず劣らず、右大臣の蔵人の少将への世話も大したもの、両家とも婿舅の関係は巧くいっていると言ってよかった。

元服を終え、婚礼を終え——源氏は一人前となった。

しかし今でも、帝の度々の「御召し」があって、心落ちつけて私邸で過ごすこともできない。それでも源氏が「御召し」がある度に、内裏へすごすごと赴くのは——あの人が——藤壺宮が、そこにいるからである。

心の奥では、藤壺の姿を思い出すたび「たぐひなし」と思え、あの優しい笑みが懐かしく思える。

「あんな人を——あの人を——妻としたい——」

そう 源氏は願う。

左大臣の姫君——葵の上は、いかにも美しく、良家の娘らしい人である。

教養も高く、楽に関する技量も、歌の才能も文句の付けようがない。

だが源氏にはどうしても葵の上を「愛する」ことができなかった。

葵の上も、もう少し私に心を開いてくれさえすれば、人並みの「夫婦」というものを演じられるというのに——。

何が気に入らないのだろうか——私が臣下に下りてしまった「元皇子」であるからか？

——夫としての、いや男としての「技量」が足りぬのか？

——何があの人の誇りを傷つけている？

——私はあの姫のことは分からない——。

なぜ同じ女だというのに——あの葵の上と藤壺宮とは、ああも違うものなのか——。

同等に高貴で同等の教養をもった二人を比べても——どうして、あの藤壺宮の美しさが際立ち、こうも魅了されるのだろうか——。

つくづく——。

未だ幼い源氏の心は、すでに大人で——藤壺のこと一つが心にかかり、苦しみさえも覚えてくる。

「あの人が——。

あの人を——」

源氏の苦しみが心の叫びを癒すはずもない。

桐壺(31)

元服をし「男」なってからは、帝も以前のように源氏を御簾の中には入れることはなくなり、藤壺に会うにも御簾を隔ててのものとなった。

「あの人の御姿が見たい——」

願ってみても叶わない。

すでに藤壺は帝につき、女御としての地位を築き始め、皆からも「藤壺女御(ふじつぼのようご)」と呼ばれるようになっていた。

管弦遊びともなれば、帝とともに御簾の向こうに座っている。

源氏は、藤壺の琴の音に合わせて笛を吹き、その笛の音に自分の思いを乗せてみたが——藤壺にその思いは届いていたのだろうか——。

藤壺の御簾の向こうから洩れる声が心の和みとなり、源氏にとっては内裏での生活だけが心休まるものとなった。

「あの人と同じ所にいるのだから——それだけで——」

源氏の——まだ幼い少年の——それが幸せだった。

宮中に五、六日滞在し、左大臣邸の葵の上の下には二、三日しか通わぬ、と言ったような途切れがちな夫婦生活が続いた。

葵の上は未だ頑で、源氏との会話も日に日に少なくなっていく。

源氏はその息苦しさから、ますます妻の下へは通わなくなった。

舅である左大臣は、

「まだ幼い御年頃だし、仕方あるまい。

父上のことも恋しいだろうし、照れくさいのもあるんだろう」

と、自分なりの推量で、若い婿を弁護し、源氏をあれこれと世話して可愛がっていた。

それでも、婿の足が遠のくのは娘の父として気にしていたのだろう。

兩人の女房は、世間でも優秀な者たちを選びすぐって仕えさせた。

また、何かにつけて源氏が気に入りそうな催しなどをして、できる限りを尽くす。

源氏の好みに合わせ、盛大なものであったから、源氏も十分楽しみ左大臣への親近感は一層のものとなり、この舅のために役に立ちたいとは思うけれど、葵の上との夫婦仲がそれでよくなるはずもない。

一方、帝は「桐壺」と呼ばれる淑景舎の局で、源氏の母であった更衣に仕えていた女房たちが今でも散り散りにならないように、引き続き仕えさせていた。

実家の邸は、皇居の修理を司る修理職、宮中の造営道具類の管理調達、装飾を司る内匠寮に宣旨を出して、またとなく立派に改築させた。

木立、山の佇まいといったものは、元々趣深いものであったが、池は広く作り直し立派に造営する様子は、それは賑やかなものだった。

「こんな所に、理想の女性を妻と迎えて住んでみたい」

源氏は口には出さない。

左大臣家の者に聞かれでもしたら、多くの者を悲しませることになる――。

それは分かっている――。

すでに十分、あの左大臣にも迷惑をかけ、あの姫にも恥をかかせているのだ。

だが――

私は知っている――。

私はあの人を――

藤壺宮を――。

我が父たる帝の、妻となったあの人を――。

私は自分の、この「思い」を知ってしまったのだ――。

――私は――。

いつだったか——帝は公務が忙しく、源氏は、久しぶりに帝と同席していない藤壺と会う機会があった。

御簾に遮られ、あの美しい姿は見えない。

周りに侍う女房たちは余りにも無表情で、居心地のいいものではなかった。

焚かれた香の薫りが、あの人の美しさを忍ばせて、源氏の胸を高鳴らせた。

「——宮——」

やっとの思いで、藤壺をそう呼んで、言葉に詰まった。

「元服してからというもの此方(このかた)——貴女は、一度も私に御声をお掛けになって下さいませんね……」

胸の高鳴りが、体の震えを呼び起こしそうになるのを、源氏は必死に堪えていた。

「お姿を——宮の御姿を——拝見したい——」

かすかに洩れた源氏の言葉に、御簾の向こうから声にならないあの人の動揺が伝わってくる。

露骨すぎる言葉に、源氏自身も戸惑っていたが、それ以外の「思い」を思いつくことができなかった。

「声を——声を聞かせてください——。

昔のように——

あの日のように——」

源氏の顔に——すでに大人の美しさを見せはじめていたその顔に——無邪気な幼さが——今にも泣きだしそうな少年の瞳が戻っていたのを、藤壺は見るのができただろうか。

御簾の向こうで微かに、あの人の声が聞こえる。

何を言っているのかは聞き取れない。

おもむろに裾を引きずる音が近づいて、藤壺が御簾から出てくるのかと淡い期待をもったが、御簾から出てきたのは源氏もよく知る藤壺付きの女房であった。

女房は藤壺からのものらしい文を一通、源氏に渡した。

淡く芳しい香が焚き込めてある文を、源氏は乱れがちな呼吸を整えながら、ゆっくりと開く。

しかし、僅かに開いた文から覗く文字が——整ってはいるが、個性も美しさもないその文字が——かつてよく目にしたあの藤壺の美しい筆跡ではないことを即時に察して、そこに書かれた歌も読まず、源氏は文を右手に握りしめた。

「私は——貴女の御字が拝見したいのです——

貴女の歌が読みたいのです——

貴女の歌に返歌を出したい——

貴女の御言葉が聞きたい——

貴女の御姿が見たい——！」

立ち上がり、御簾にまで迫らばかりの源氏を、周りの女房たちが必死になって止めに入る。

「私は、貴女を——。

あの日から――

貴女と過ごしたあの幼き時から――！」

最後の言葉を――「あの人」に言うべき一言を、源氏はどうしても口にすることができなかつた。

無理にでも力を加えれば振りほどけるはずの女房たちの制止にも、源氏はそのまま止まられたまま、前に進めなかった。

「元皇族」としての――藤壺を継母として抱くことになってしまった「帝の子」としての「恐怖」が、最後の言葉を、源氏の危うい自制心のなかに閉じ込めていた。

源氏が藤壺を「想う」ことは、臣下が「帝の妻」を「想う」ことになる。

また、藤壺は既に父の妻となっており「己の母」を「想う」ことにも等しい。

その「想い」を――別のたった一言で言い換えられるはずのその「想い」を――

源氏が藤壺に伝えることはできない。

そのようなことが、許されるはずがない。

「許されない」ということが、源氏のその身を縛りつける――源氏の首を締め上げる。

そのようなことで、己の自由を失う自分が、源氏には不甲斐ない。

――私は――何をやっているんだ――。

――私は――臆病者だ――。

――源氏の「光君」という名は、高麗人が源氏のことを褒め讃えてつけた名であるそうだが、源氏は、その名の輝かしさに自分を――

自分の「思い」をさらけ出せぬ、己を呪っていた――。

コラム1

源氏物語を読んでいて、少しいへんなのは、かなりの量の「基礎知識」を求められることです。

もともと、当時の上流階級——つまりは知識階級の人々を意識して書かれたものですから、当然と言えば当然なんです。

例えば、桐壺のある場面などは、本文中にも書きましたが、白楽天の書いた「長恨歌」や伊勢の歌を読んだことがないと、原文を読んだだけでは、なんのことやら全く読み取れない部分です。

本文としては、ほんの数行の文章ですから。

当時の人には、釵(かんざし)を受け取った帝が、玄宗と楊貴妃に自分たちを重ね合わせて、嘆き悲しむ様子が、ありありと目に浮かんだに違いありません。

また、長恨歌と対比させることで、よりいっそう、帝の、というか男というものの「愚かさ」が際だってくるわけですが……長恨歌を読んだことのない私には、なかなか難しいものがありました。

数多く出てくる「和歌」に関しても、同様のことが言えます。

源氏物語の登場人物たちは、当たり前のように「古今集」や「後撰集」から引用しながら、数々の歌を詠います。

当時の人たちも、そうやって歌を作っていたんでしょうね。

決して「パクリ」というのではなく、そうすることで、自分の歌だけでなく「元歌」の意味も含まれるわけですから、より相手に深読みをさせる「余地」が出てくるからです。

それが「粋」であり、「ウィット」でもあります。

しかし、

『自分が知識豊かなこともさることながら、相手の知識も当然のように期待する』

そういう「文化」が、現代人の私にはありませんから、たいへん苦勞することになるわけです。

。

皆さんも一度、源氏物語の原文をお読みになって、その「行間」を感じ、深読みしてみるのもおもしろいかも知れません。

《桐壺(20)参照》

「源氏」という姓で、私たちがすぐに頭に浮かべるのは、源頼朝や源義経などの、いわゆる「清和源氏」を源流とする「武家源氏」です。

第56代の清和天皇の子孫にあたる家系で、もっとも栄えたのは第六皇子貞純親王の子・六孫王経基の系統とされています(Wikipediaより)。

本文にも書きましたが、「皇室と『源』を同じにする」という意味で、本来は名誉ある姓なのでしょうが、その実、皇位を望めない親王や、親王宣下さえも望めない皇族になることが多いわけですし、中には、経済的な理由から多くの皇族を養うことが困難となり、朝廷から一方的に言い渡されることもあったといいますから、複雑な思いで「源氏」となった人も多かったと思います。

ところでこの「源氏」、第52代嵯峨天皇が、多数いた皇子皇女に与えたのが始まりとされます。

これを「嵯峨源氏」というのですが、その一人が、嵯峨天皇の12男(!)の源融(みなもとのとおる)で、この人が、光源氏のモデルとされる人。

この人自身は、のちに左大臣になりながら、藤原基経との政争にやぶれて自宅に引きこもったりで、決して人臣を極めた、って感じではないんです。

また、陽成天皇の譲位で皇位を巡る論争が起きた際、

「いかがは。近き皇胤をたづねば、融らもはべるは」
(自分も皇胤の一人なのだから、候補に入る)

と主張しましたが、源氏に下った後即位した例はないと基経に退けられたといいます(Wikipediaより)から、ちょっと悲劇な感じ。

だいたいその時代に、作中にもちよくちよく出てくる宇多天皇などもいたりして、紫式部の時代の人たちは、なんとなーく「源氏」に、源融などを重ねて、誉れ高くももの悲しいイメージを抱いたんじゃないかなあ、と思って、本文のような書き方にしました。

だからこそ、のちの「光源氏」の栄達が際だつことになるわけですし、「臣下が天皇を越える」というあり得ないファンタジーが生まれることになるわけです。

そういうフィクションも、もととなるイメージをしっかり持っていると、より深く楽しめるのではないのでしょうか。

コラム3

いよいよ、源氏物語の最高のヒロインである「藤壺」の登場です。

後に登場する「紫の上」とともに、源氏の心を最後まで占める女性となります。

源氏、藤壺、紫の上は、究極の三角関係となっていくわけです。

源氏物語を読んでいて思うことがあります。

もしも、源氏物語の登場人物がそのまま出演した映画を作ったとして、出演者のテロップを流したときに、「藤壺」と「紫の上」は、どちらのクレジットが先になるのかなあ、と。

藤壺がいなければ、のちの紫の上との出会いなどは一切無かったはずですし、何より、源氏と藤壺は後に、誰にも言えない大罪をともに背負うこととなります。

ですが、最終的に源氏の心を満たしていくのは紫の上です。

最後は決して幸せではないのですが、だからこそ、源氏は紫の上を無くして更めて、その大切さを思い知ることになります。

源氏にとって、どちらがより愛した女性だったのか、紫式部はあえてはっきりさせないままに描いています。

そしてそれこそが、人の心なのかも知れない、と思わせてくれます。

もしも人気投票をやったとしても、人気を二分するであろう二人を、原文の雰囲気のまま魅力的に素敵な女性として描けるように、これからもしっかりと読み解いて行きたいと思います。

コラム4

今回の内容について、一つお断りを。

多くの方がご存じかも知れませんが、源氏物語に出てくる人々の多く、特に女性のほとんどは、「名前」がありません。

もちろん、原文中にもです。

主人公からして「光源氏」ですからね。

作中では、ほとんど「源氏」か「光君」通していますが、いわゆる本当の「名前」は分かりません。

その一番有名な呼び方の「光源氏」についても、私は今「末摘花」の帖を訳している所なんです、そこまで「光源氏」という呼び名を眼にしたのはたったの一回です。

源氏の母親なんかは、一般的には、帝から賜った局の名からと「桐壺の更衣」呼ばれることが多いですが、原文中には一切見られない呼び方です。

作中では「かの更衣」と呼ばせてもらっていますが、原文ではそれさえない。

源氏を生んだのちに、一度だけ「御息所」と呼ばれる箇所があるのみです。

登場人物、特に女性の呼び名の多くは、作中の歌や場所、エピソードを結びつけて、後の世で勝手につけたあだ名のようなもの。

「葵の上」に至っては、その名の由来になった「葵」の帖は、かなり後にしか出てきませんし、名前とエピソードがつながったとたんに「葵の上」は亡くなってしまうので、しかたなく、強引に最初から名前を付けてしまいました。

ごめんなさい。

今後、みなさんが知っている「名前」がなかなか現れずに、いらいらする場面もあるかと思いますが、その「歌」や「エピソード」と「名前」がつながっていく過程も含めて、原文の雰囲気味わっていただきたいと思いますので、ぜひそのまま読んでいただけたらなあ、と思います。

この源氏物語のキャラ設定——特に、葵の上のキャラ設定に関しては、多分に、「あさきゆめみし」の影響が大であります。

私自身、源氏物語の「入り口」が「あさきゆめみし」でしたから、当然と言えば当然なんです。

少女漫画を読んだことなかなかった私が、姉が買い集めていた「あさきゆめみし」のおかげで、古典や歴史の勉強が大好きになったのは、本当にありがたい出会いでした。

この源氏物語のふつう語訳を書くにあたって、オリジナリティーを出すために、独自のキャラ設定を模索した時期がありました。

が、自分にそんな能力があるはずもなく、すぐにやめました(笑)。

源氏物語をそのまま読む限り、はっきり言って、葵の上は「やな女」でしかありませんでした。

ただ、そのまま書いてしまうと、後々、話が進めづらい。。

二人の間に生まれる夕霧も救われません。

いくら源氏が息子を深く愛しても、両親が愛し合った事実が少しでもないと、子供の出自というものは、どうしても暗く見えてしまうような気がしたからです。

また、、葵の上を呪い殺すことになる六条御息所の悲哀というものが、逆に出てきません。

いわゆる究極の「ツンデレ」っぽく描けたら成功かなあ、と思うんです。

その点「あさきゆめみし」での葵の上の書き方は、抜群でした。

私の葵の上のキャラ設定は、すこし極端に拡大解釈しすぎかもしれませんが、私はできるだけ、源氏物語の中に「やなやつ」を登場させたくありませんでしたので、こんな形に。

「やなやつ」は、源氏一人で十分ですから(笑)

「源氏物語」は、決してハッピーエンドでもなければ、ヒューマンドラマでもありません。

徹底的に、当時の男女のリアリティを凝縮して、ファンタジーに仕上げたもので、本当に幸せな登場人物というのは、非常に少ない。

だからこそ、源氏に愛される女性たちぐらいは、いい人ばかりがいいかなあと思うんです。

みなさんは、どう思いますか？

源氏と、葵の上との婚礼の様子は、当時の風習を参考に、私が勝手に、大幅に加筆したものです。

原文には、

「その夜、大臣の御里に、源氏の君まかでさせたまふ。作法世にめづらしきまで、もてかしづきこえたまへり」

とあるだけ。

『まかでさせたまふ』とは帝が源氏を『退出させなされた』ということ。

源氏が心ならずも結婚させられた感が漂います。

そして『もてかしづ』いているのは、もちろん左大臣。

世にもめづらしきまで——つまり、これまで例がないほどに、源氏を下にも置かぬ感じで、迎え入れているのが分かります。

ただ、それも当時の風習が分かっていたらこそ。

私たち現代人が

『教会で式を挙げ、その後、籍を入れに行った』

という一文を読むだけで、新郎新婦の「一日の動き」がだいたい思い浮かぶのと同じです。

当時の風習が分からない私たちには、それをちゃんと分かっている必要があります。

言われるままに結婚した源氏がそれでも、めんどくさい婚礼の作法を粛々となす。

しかも、源氏と葵の上の心情を察せず、左大臣を初めとした大人たちは盛況なまでにもてなす——。

周りが盛り上がれば上がるほどに際だってしまう、源氏と葵の上との「距離感」——。

当時の人たちが自然と脳裏に浮かべたであろうそういう雰囲気、みなさんと共有したくて、出過ぎたまねとは思いましたが、本文のような形を取らせていただきました。

源氏物語を現代語に訳すにあたって、最初に目指したのは、いわゆる「直訳」でした。

参考にしたのは、橋本治氏の「桃尻語訳 枕草子」です。

「春って曙よ！」

で始まるその本に、高校時代衝撃を受けたのを今でも覚えていたからです。

ですが、それはすぐに断念しました。

「桃尻語訳 枕草子」は、各段をとりあえず直訳した後、清少納言自身が語るという形で、各段の説明をしてくれていますが、物語にその形式はそぐわない。

かといって、ただ単に直訳をしてしまうと、はっきり言って、現代人には何を言っているのかわけが分かりません。

第一の原因は、主語の不明瞭さです。

本文は、主語という主語が、ほとんど省略されています。

おそらく、当時の読者は、尊敬語などの使われ方で、大体の主語が分かるんですが、それを現代語で再現しようとしてもなかなか難しい。

わかりやすく主語を加える時点で、直訳ではなくなってしまうわけです。

第二の原因は、文化や風俗の説明です。

さすがにこれを無視して、読者のみなさんの見識に依存し、

「これぐらい分かるだろう」

とか、

「自分で調べて下さい」

という態度で原文の名称をそのまま写すわけにはいきません。

辞書で簡単に調べられる「単語」は、さすがにそのまま用いましたが、やはり、話の流れで、理解した上で読み進めていただかないといけないこともあります。

とって、話の流れを中断するような「注釈」や「補注」という形式は取りたくありませんでした。

やっぱり、「野暮ったい」からです。

第三は、古文特有の「行間」。

本来、これこそ、読者の方の解釈に任せるべきなのかもしれませんが、これも第二の理由の文化や風俗と深く関わっています。

以前もお話しましたが、例えば「源氏」という姓には、誉れ高い雰囲気とともに、もの悲しさも漂っている。

でも、それを現代人の私たちが、原文の「行間」から読み取るのは、あまりにも限界があります。

そういう部分を、私の主観を通しての解釈になってしまうのをご承知いただいた上で、説明させてもらおう、と思ったんです。

それらを考えながら試行錯誤した結果が、今、書いている「ふつう語訳」ということになります。

次回からは「帚木」「空蟬」と進んでいくことになりますが、これからもよろしく願いいたします。

ふつう語訳 源氏物語 桐壺

<http://p.booklog.jp/book/31912>

著者：渡 司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/wtnbkjkbntw/profile>

参考文献

1. 新潮日本古典集成 源氏物語
石田穰二、清水好子 校注
新潮社
2. あさきゆめみし
大和和紀
講談社
3. 窯変 源氏物語
橋本治
中央公論社
4. 大擲源氏物語 まろ、ん？
小泉吉宏
幻冬舎
5. 「源氏物語」と恋舞台 姫君たちの京都案内
蔵田敏明、薄雲鈴代
淡交社
6. 源氏物語が面白いほどわかる本
出口 汪
中経出版
7. サイト；源氏物語 『源氏物語』原文とその背景を読む
<http://heian.cocolog-nifty.com/genji/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31912>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31912>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.